年報

津山弥生の里

第４号（平成７年度）

１９９７

津山弥生の里文化財センター

序

津山弥生の里文化財センター職員はもとより、関係者の皆様の啓蒙・啓発の努力もありまして「埋蔵文化財」の認識やその重要性について、年々ご理解、ご協力をいただけるようになってきました。

最近では、開発計画をされる方々から事前協議がなされるようになり、文化財センターの助言が求められることが急増してきました。これはほんの一例にすぎませんが埋蔵文化財が周知されてきた現れと思います。

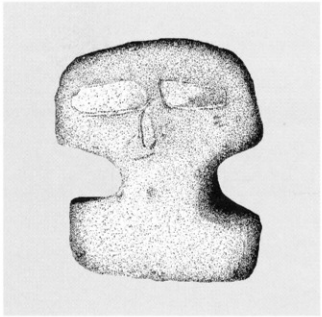
ところで、経済活動の回復の遅れが長引いており、財政事情もなかなか好転の兆しが見えないようです。当然、この余波は「非生産的なもの」と誤解されやすい私たちの業務にも及んで、これ以上のバックアップは望めない現状です。この年報も刊行が継続される絶対の保証はありません。

しかし我々職員一同、より合理的で高度な知識と技術を駆使し、敏速な行動で確実な成果を上げるよう努力していく所存です。

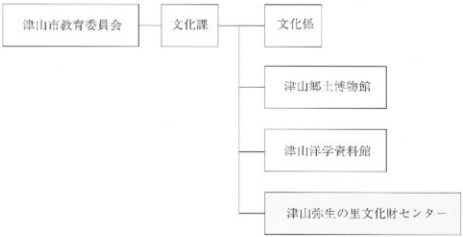
今後も関係者の方々、市民各位のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年3月31日

津山弥生の里文化財センター
所長　神田　久遠



津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置（H９．３．３１現在）

所　長	神田　久遠	
次　長	中山　俊紀	
主　査	安川　豊史	
〃	行田　裕美	
主　任	青木　睦子（～H８．９．３０）	
主　事	小郷　利幸	
〃	平岡　正宏（H８．１１．１～）	
〃	坂本　心平	
嘱託員	野上　恭子	
〃	岩本　えり子	
〃	江見　祥生	
〃	家元　弘子	
臨　時	河本　雅子（H７．７．１３～H８．３．３１）	
〃	小澤　かおり（H７．８．１～H８．２．２９）	
〃	仁木　良知（H７．１１．１７～H８．２．２９）	
〃	大谷　みゆき（H８．４．１～H８．１１．３０）	
〃	丸王　佳苗（H８．４．１～H８．１１．３０）	
〃	橋本　玲恵（H８．１２．１～H９．３．３１）	
〃	浅岡　美恵（H８．１２．１～H９．３．３１）	

目　　次

1．津山弥生の里文化財センター事業概要 …… 1
（1）展示事業 …… 1
a．入館者数 …… 1
b．啓発・普及活動 …… 4
c．寄贈資料 …… 5
（2）埋蔵文化財発掘調査 …… 6
平成7年度調査一覧 …… 6
（3）その他の事業 …… 8
（4）調査の概要 …… 11
a．大田大正間遺跡の調査 …… 12
b．四奥田遺跡発掘調査概要（平成7年度） …… 15
c．ヒナメ塚1号墳 …… 18
2．資料紹介・研究ノート …… 25
（1）津山の弥生土器2（瓮形土器・高坏形土器） …… 26
（2）有孔鉄石考 …… 31
（3）医王山城採集の瓦 …… 35
（4）亀甲形陶棺の形について想うこと …… 40
3．講演録
「折口学による日本の神々」 …… （1）

例　言

1．本書は、津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターが平成7年度に実施した事業概要についてまとめたものである。

1．埋蔵文化財の発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、坂本心平、座務を青木陸子、出土遺物の整理は野上喜子、岩本えり子、家元弘子、民俗資料の整理は江見祥生が主として担当した。本書の執筆は各担当者がおこない、編集は小郷がおこなった。

1.津山弥生の里文化財センター事業概要

（1）展示事業

◆入館者数

当センターは開館してから、今年で６年目を迎えました。入館者数は平成７年度末現在で延べ４１，５９８人に達しました。しかし、高・大学生、老人はあいかわらず減少の傾向にあります。

昨年度の入館者数は下表のとおりです。

平成７年度総利用者数内訳

区分／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
一　般	225	409	261	202	302	155	221	344	61	72	73	243	2,568
高・大	9	36	1	49	57	8	1	1	0	1	8	13	184
小・中	113	611	48	140	205	26	263	85	9	39	154	280	1,973
老　人	22	44	11	9	10	6	3	5	0	2	0	27	139
合　計	369	1,100	321	400	574	195	488	435	70	114	235	563	4,864

◆民俗資料について

①今年度は、昨年度の「嗜好品用具」、「飲食用具」のコーナーを一部変更しました。

②『住居』のコーナーを設け、「家具、調度」に関する道具類を展示、収蔵しました。

（例）小物入れ、縄とり、行灯、十能

③見学者の参考になるようにと、「醤油舟」、「コキ箸」の複製品を作製し、展示しました。

これらの中でも、「コキ箸」は、他の脱穀道具（麦打棚、千歯）とその性能を比べることができ、「後家倒し（ごけだおし）」の通称もよくわかり、小学生の学習に役立つと好評をいただいております。

今年も民俗資料及び展示に関するたくさんの貴重な御意見をいただきました。有り難うございました。

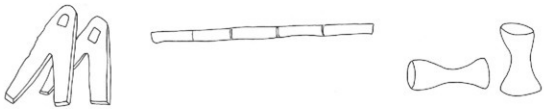
（江見祥生）

嗜好品用具、飲食用具展示風景

◆民俗資料紹介

今回は、「こも編み機」を紹介します。

これは、昔の農家には必ず１台はあったもので、「台（脚）」と「棒（横木）」、「つちのこ」（８個１組）から成り立っています。（下図）



これについて、いくつかの聞き取り調査を行いました。（１９９６．４）

（対象は津山市近郊の農家の７１歳の男性の方）

①材質はなにか？

「棒（横木）」‥松が多い。

理由（１）当地方には細い松が多かった。

（２）木が真っすぐで、削らなくても使えた。

「台」‥堅木。クヌギ等二股になり、さけにくく使いやすいもの

「つちのこ」‥カシが多い。

理由（１）摩滅しにくい。

（２）目方がいる。

②「棒（横木）」の長さは？

約１３３～１４０㎝。中央部１１０～１１３㎝。むしろの幅の長さにしてある。

③小縄の長さの単位は？

「ヒロ」（尋）を使う。一尋は１６０～１７０㎝で大人が両手を広げた長さをいう。

④小縄はどのような材料を使うか？

藁の場合―　麻縄、シュロ縄、藁縄（「藁すぼ」※注１）

米俵の場合―藁縄（この藁は、餅藁で丈が長い方が良いので、晩生の藁を使う。）

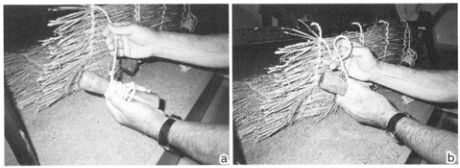
⑤これで編めるものは？

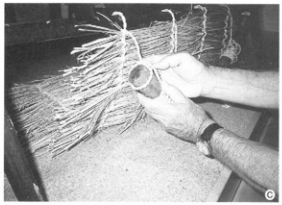
こも、藁、米俵、灰ツゴ等

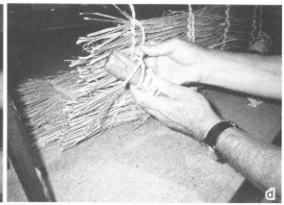
⑥編むときの小縄の巻き方にコツがあるのか？

「つちのこ」に巻くとき、縄の綯りが戻らないように注意する。

小縄が簡単に繰り出せるように巻き付けることも大切だ。（図ａ～ｄ）





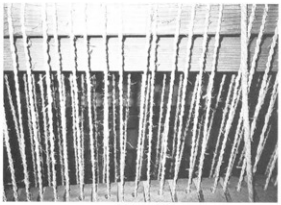


⑦一日の作業量は「こも」でどのくらいか？

人により、いろいろだが「上〔うわ〕ゴモ」（俵の外身）で２０枚位が標準である。夜業では、５枚位。（夜業は約２時間半の間、仕事量は昼の１／３が目安）

以上の回答を得ました。

※（注１）‥この小縄は「藁すぼ」（節をとった、節の間だけ）で編む。下図にその違いを写真で示す。



普通の小縄

藁すぼの小縄

次に「実俵コモ」を見本に編み方を概略して説明します。

順序

① 材料を吟味し、用意する。

② 小縄をなう。

③「つちのこ」に小縄を巻く。

④「棒（槙木）」の刻み目に③を置く。（４対）

⑤ 材料を一掴み程づつ、編み手の左右に置いて材料の供給をスムーズにする。

⑥ 小縄の上に藁を置いて、手前側の「つちのこ」を右手に持ち、左から向こう側の右へ置いて編んでいく。このとき右手の親指で均等の力で綱目をしっかり押さえておくのがコツ。

以上の手順で編んでいきます。

先の調査で、夜業の話がでましたが、夜業についてさらに質問したところ、「私達の年代でも子供のときのことなので、よく覚えてないが、近所の同年配の人で、調べた人がいる」とのことで、後日次

の表を入手することが出来ました。

（本人の了解を得て一部変更しています。空白部は不明部分。なお対象は男性のみ）

農家作業調査（１９９６．６）　綾部　内田 泉美氏　昭和１０（１９３５）年頃の様子

名称	１日（朝～晩）作業量	夜業（７～９時半）作業量
実俵ゴモ （俵の中身できつく編む）	小縄（１枚に１０尋）と２５枚	７枚（１枚４０編）※（注２）
トゴモ	小縄（同１１尋）と２０枚	５枚
小縄		６０～７０尋
むしろ	小縄（６０尋、３８本）と１枚	縄立て（むしろ機の）
灰ふご	１荷（２俵）	
蓑	編むだけで１／２ （小縄と藁は別）	

※（注２）……１本の縄につき４０編みの意味。

夜業ではこの他に機依も多く作られたということですが、これは簡単に作れるので、数量は一定ではないということでした。

この夜業は主に農閑期に行われ、ほのぐらい明かりの元での仕事は、厳しいものだったそうですが、一方では社交の場でもあり、団欒の場でもあったということです。　（江見祥生）

◆啓発・普及活動

【刊行物】

◎『年報　津山弥生の里第３号』

◎『長畝山北１１号墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第５７集

【講演会・研究会】

★第１４回　津山市文化財調査報告会

平成８年２月２４日（土）　場所　津山市総合福祉会館

講演

「折口学による日本の神々」　歌人　穂積生萩先生

調査報告

「西吉田北遺跡の調査」　津山弥生の里文化財センター　坂本心平

「仁木永祐の顕彰碑について」　津山洋学資料館　乾　康二

「森家江戸番邸について」　津山郷土博物館　尾島　治

★美作考古学談話会

第１回　５／１３（土）津山の遺跡について（小郷利幸）

第２回　７／　１（土）考古学から見た「まつり」のはじまり（行山裕美）

第３回　９／　２（上）古墳時代の集団組織（中山俊紀）

第４回　１１／１１（十）陶棺を考える（安江尊史）

第５回　１／２０（土）発掘調査現場の見学（小郷利幸）

第６回　３／　９（土）稲作以前の食生活（坂本心平）

★発掘調査速報展

「津山の歴史を掘る」平成５年度速報展

平成７年４月１日～平成８年３月３１日

展示遺跡及び主要な出土品

河辺上原遺跡（津山市河辺）

須恵器、土師器、鉄器、玉類

緑山北遺跡（津山市綾部）

弥生土器

西奥田遺跡（津山市大田）

縄文土器、土師質土器、銭貨、鉄釘、

銅製煙管

平成５年度速報展「津山の歴史を掘る」

◆寄贈資料

【民俗資料】

清水真佐子	下駄１点
二木　一	はり板２点
堀岡　辰男	槓杵２点、コキハシ１点
岡田阿弥子	洗濯板１点

【考古資料】

坂手 幸義	短刀１点

（2）埋蔵文化財発掘調査

平成7年度調査一覧

NO	遺跡の種類及び名称	所在地	調査原因	調査種別	調査期間	遺構・遺物等	備　考
1	散布地　一丁田遺跡	山北４２９－１他	宅地造成	立会	4/11～4/27	遺構・遺物なし	
2	集落　大山西奥田遺跡	大田４９８他	市道拡幅	発掘調査	5/1～5/22	建物跡、陥し穴、縄文上器	本書
3	集落　竹ノ下遺跡	沼７７－９	駐車場造成	立会	6/16	遺構・遺物なし	
4	散布地　未定	林山３２４　３	宅地造成	立会	6/25	遺構・遺物なし	
5	集落　西吉田北遺跡	西吉田６７２－３他	宅地造成	発掘調査	7/7～10/20	弥生住居跡、古墳1、弥生土器、縄文土器、鍛冶具等	第５８集
6	集落　有本古墳群他	戸島８８０－１他	流通センター建設	発掘調査	7/10～3/31	古墳、住居跡、建物跡、土壙墓、上師器、鉄器、玉類等	第５９集
7	集落　京免遺跡	沼１０－１４	宅地造成	立会	7/17～7/20	遺構・遺物なし	
8	散布地　未定	押入２	宅地造成	立会	8/1	遺構・遺物なし	
9	散布地　未定	河面１００２－１	宅地造成	立会	8/15	遺構・遺物なし	
10	集落　正善庵遺跡	東　宮５５９－１	アパート建設	立会	8/20	遺構・遺物なし	
11	集落　正善庵遺跡	東一宮７１５－１	アパート建設	立会	8/28	遺構・遺物なし	
12	社寺跡　美作国分寺跡	国分寺４６４－１	住宅改修	立会	9/26～11/10	遺構・遺物なし	
13	社寺跡　夜半寺跡	高野本郷１０３０	個人住宅	立会	10/2	遺構・遺物なし	
14	官衙跡　美作国府跡	総社２９－６他	下水道管埋設	立会	10/23～12/12	丸	
15	散布地　未定	押入９７－２	宅地造成	立会	11/1	遺構・遺物なし	
16	散布地　未定	日上１０７４他	水田構造改善事業	確認調査	11/6～2/16	弥生土器、須恵器	
17	散布地　一丁田遺跡	山北４２９－２３	住宅建設	立会	11/15	遺構・遺物なし	
18	集落　京免遺跡	沼７　７	事務所建築	発掘調査	11/28～12/5	弥生時代溝、柱穴群、弥生土器	
19	集落　大山大正開遺跡	大田８７２他	公園管理棟他建設	発掘調査	11/17～11/27	柱穴群、弥生土器、中近世磁器	本書
20	散布地　未定	河辺５８５－１	宅地造成	確認調査	12/1	遺構・遺物なし	

NO	遺跡の種類及び名称	所在地	調査原因	調査種別	調査期間	遺構・遺物等	備　考
21	集落　京免遺跡	沼１１-４	アパート建設	立会	12/1.2	遺構・遺物なし	
22	社寺跡　夜半寺跡	高坊本郷１０３３-１	住宅建築	立会	12/20	遺構・遺物なし	
23	集落　未定	椿高下８７-１他	津山高校記念館建設	発掘調査	12/22～2/15	弥生住居跡、近世溝・柱穴	
24	散布地　未定	河辺溝田８５３-１他	店舗建築	確認調査	2/26	遺構・遺物なし	
25	散布地　未定	河辺８４１-１	アパート建設	立会	3/2	遺構・遺物なし	
26	散布地　未定	河辺２１７５-１他	宅地造成	確認調査	3/7	遺構・遺物なし	
27	官衙跡　美作国府跡	小原１２８０-２	アパート建設	立会	3/12	遺構・遺物なし	
28	古墳　ヒナメ塚１号墳	上横野４３４１-１３	分布調査	確認調査	3/27～3/29	外護列石をもつ横穴式石室、陶棺片	本書
29	散布地　未定	国分寺５６-１他	個人住宅	立会	8・4/9	遺構・遺物なし	
30	散布地　未定	高野本郷１４８２	駐車場造成	立会	8・4/9、4/12	遺構・遺物なし	

◎現地説明会

平成８年３月３０日(土)

有本古墳群・有本遺跡

（3）その他の事業

★埋蔵文化財分布調査

平成８年２月２２日～３月３１日

津山市上横野・山方地域

★遺跡の保存・管理

中宮１号墳横穴式石室補修工事

日上畝山古墳群墳丘測量調査

美和山古墳群草刈

沼遺跡草刈

井口車塚古墳草刈

正仙塚古墳草刈

分布調査風景

日上畝山古墳群
測量風景

井口車塚古墳草刈後

再生弥生の里

市民及び観光客に親しまれている沼住居跡は、１９５２年（昭和２７年）に発見された弥生時代中期を中心にした集落遺跡です。１９５６年（昭和３１年）７月４日には津山市の文化財に指定され、今日にいたっています。

現在は、竪穴式住居２棟、高床式倉庫１棟が復元されて、史跡公園弥生の里として整備されています。平成２年１１月の津山弥生の里文化財センターオープン以来、当センターが管理をしています。

津山やよいライオンズクラブ（丸尾泰三会長）には復元当時から、諸施設の設置や年１回の草刈奉仕作業など整備に多大のご協力をいただいています。

今回も老朽化した諸施設の取り替え、樹木の植栽などの寄贈を受けました。この寄贈により、弥生の里の敢策がしやすくなり、景観も見違えるようにきれいになりました。

本来、行政が担うべき基本的な業務をいち早く察知され、毎回寄贈いただいていることにたいし、厚くお礼申し上げるとともに、少しでも長く活用できるように管理していきたいと思っています。

津山ライオンズクラブのますますの発展を期し、そして、今後とも弥生の里の整備にご助力をいただくことをお願いして、お礼の報告とします。

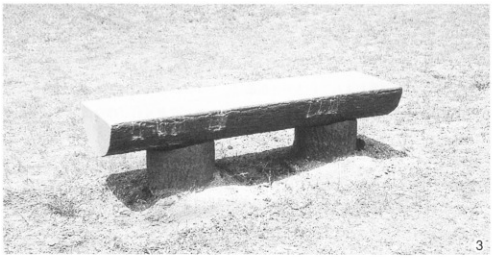
（青木睦子）

【寄贈年月日】　平成８年５月２７日

【寄 贈 目 録】　①昭和５１年設置の三角標柱のステンレス製への取り替え（写真１）
②案内板の取り替え（写真２）
③擬木ベンチの設置（写真３）
④枝垂れ桜（５本）植栽（写真４）
⑤外灯柱塗り替え（写真５）

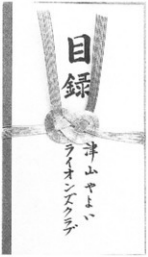
1

2


3

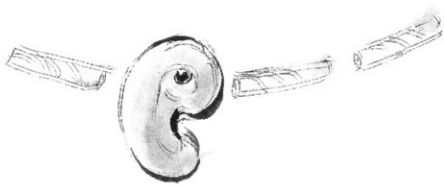
5

4



目録贈呈式

（4）調査の概要



大田大正開遺跡の調査

大田大正開遺跡は、津山市街地北方の低丘陵、旧岡山県酪農試験場跡地に位置する。同地が、県北リゾートセンター建設予定地として確定されたため、岡山県教育委員会は、対象地２８ｈａについて平成５年度に確認調査を実施。５箇所の事前調査必要範囲が決定された。大田大正開遺跡は、この内の１地区に相当し、津山市がこの部分で施設建設を予定していたため、その部分の調査は津山市教育委員会で実施することとなり、建設計画が確定しているリージョンセンター建設部分及び公園遊歩道部分について、今回調査した。

調査期間は平成７年１１月１７日から２７日までで、調査面積はリージョンセンター部分約４５０㎡。遊歩道部分は幅２ｍの試掘とし、総延長１８０ｍ、調査面積約３５０㎡である。

図1　位置図（国土地理院2万5千分の1地形図「津山東部」）

図2　調査区位置図（縮尺1：2500）

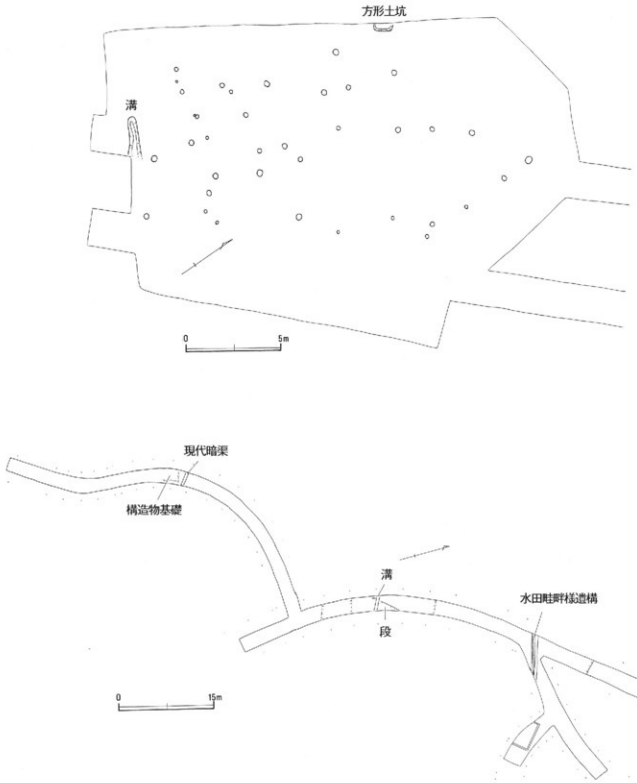


図3　調査区平面図　上：リージョンセンター調査区（縮尺1：200）
下：遊歩道調査区（縮尺1：600）

造　構

リージョンセンター調査区

基本的層序　４０～６０㎝程の耕土層を取り除くと、基盤の地山層が、緩く南に傾斜して広がっていた。対象地は、水田及び畑地として永く使用されて、基盤層以上は大型機械による撹乱を全面に受けており、基盤層にも大型機械の掘削によるとみられる南北方向の細い併行の溝跡が密に発見された。また、北部分では基盤層上部に造成土が広がっており、かって、掘削、積立が繰り返されたことが想像できた。このため、検出遺構も例えば柱穴などは深さ１０㎝ほどをかろうじて残すのみで、多くの部分は既に消失していると考えられた。

遺構　発見された遺構は、柱穴４５本、土坑１、溝状遺構１である。柱穴は大きいもので直径３５㎝程度、小さいもので、杭先端痕かとみられる直径１０㎝内のものまでが含まれる。いづれも、まとまりなく散在し、建物等の遺構を推測させるものはなかった。所属時期も多時期にわたるものとみられ、弥生土器細片を含むもの数本、中近世陶磁器片を含むもの数本、他は無遺物である。（なんらかの遺物を含んでいたもの１０本）

土坑は、１辺１ｍ内外の方形土坑とみられるものであるが、調査区外にかかり西側半分は調査していない。深さ２０㎝程を残し、底面は平であった。埋土は暗褐色土であったが、遺物の発見はなく、時期不明。

溝は、幅５０㎝程度で深さ１０㎝内外。２ｍほどにわたって検出されたもので、底及び壁面が不整形で、自然に形成された可能性が強い。遺物は、図図可能なものがない。なお、遺構検出時にサヌカイトチップ少量を発見した。

遊歩道調査区

基本的層序　北部分は地山面が高く、表土下２０㎝程で地山岩盤にたった。重機による、削平造成が考えられ、遺構の発見はなかった。また、南端部分も類似状況を示していたが、この部分は、暗渠、建物基礎、用排水パイプ等が縦横に巡らされていた。中央部は、浅い谷状を呈し、基盤層まで８０～１２０㎝の堆積土が存在した。このうち、表土下６０～１００㎝は地山ブロックを含む造成土で、重機による盛土と判断された。以下、近世遺構の水田耕土層が広がっており、地山に達する。

遺構　水田畦畔様遺構、溝、段等が発見された。水田畦畔様遺構は、幅３０㎝の黄色地山ブロックが７ｍ程にわたり直線状に発見されたもので、両側に幅２０㎝程の溝が取りつき、近現代水田の畦畔と判断された。溝は端正な鑓面をもち、内部に砂質土が充満し上部を黄色地山ブロックで埋めたもので、水田暗渠と考えられる。段は方形住居の１辺を思わせるものであったが、暗渠を切っており、近現代の遺構とみられる。

（中山俊紀）

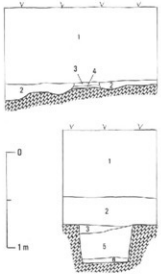


図4　畦畔様遺構断面図（上）
溝断面図（下）
＜いずれも縮尺1：40＞

西奥田遺跡発掘調査概要（平成７年度）

1　はじめに

本遺跡は津山市街地の北方、市北部の山麓から南々西に延びたなだらかな丘陵上に位置する（第１図）。今回の調査部分の南西に隣接する地区は、平成５年度に津山市教育委員会が調査を行い、近世墓群などが検出された（註１）。また、北東に近接する地区は平成５年度に岡山県教育委員会による調査が行われ、縄文時代早期の竪穴住居などが検出されている（註２）。

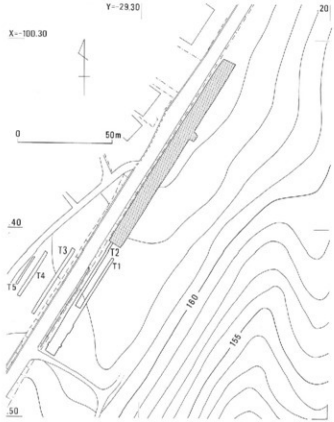
第1図　遺跡位置図（S=1/50,000）

2　調査の概要

この調査は市道２００９号線の拡幅工事に先立つものである。調査は平成７年５月１０日から５月１９日にかけて行った。調査区は平成５年度調査のＴ１、Ｔ２を北東に延長した位置で、調査範囲は遺跡推定範囲内の工事対象部分すべてである。調査面積は約９１０㎡である。

発掘調査は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター主査行田裕美、同主事坂本心平が担当した。発掘作業にあたっては津山市シルバー人材センターにお世話になり、また下記の方々のご協力を得た。記して深く感謝致します。

（発掘作業）末澤賢次、藤沢淳一郎、
森二三夫、山下加海



第2図　調査区位置図（S=1/2,000）

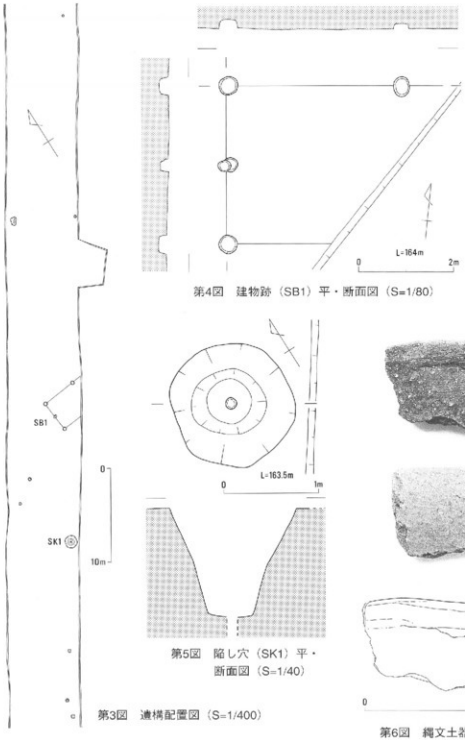
3　遺構

全般に遺構密度は低いが、建物跡１（ＳＢ１）、陥し穴１（ＳＫ１）、土壙１、小ピット若干が検出された。以下、主な遺構について述べる。

ＳＢ１（第４図）

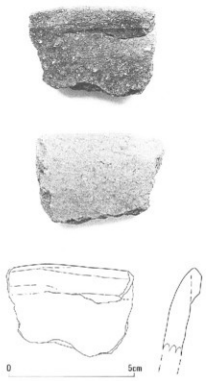
建物東側部分については明らかでないが、東西棟と考えられる。梁間２間、柱穴間の距離は１．７ｍ、桁行は不明であるが、柱穴間の距離は３．７ｍである。明確に時期を決定できる遺物は出土していない。

第4図　建物跡（SB1）平・断面図（S=1/80）



第3図　遺構配置図（S=1/400）

第5図　陥し穴（SK1）平・断面図（S=1/40）



第6図　縄文土器写真・実測図（S=2/3）

ＳＫ１（第５図）

縄文時代の陥し穴と考えられるものである。検出面での直径約１．３ｍ、深さ約１．２ｍを測る。壁面は中程から下へ傾斜が強くなり、底面には直径１２㎝の小ピットが存在する。遺物は出土せず、正確な時期については明らかでない。

4　遺物

ＳＢ１の柱穴埋土から、混入と考えられる縄文土器片１点が出土した（第６図）。破片は口縁部付近で、

端部外面を粘土帯の貼り付けにより、幅1㎝程で肥厚している。内、外面とも無文で暗灰褐色を呈し、外面はナデ仕上げ、内面はヘラ磨きのようである。彦崎Ｋ1式とされるものに類例が見られ（註3）、縄文時代後期中頃のものと思われる。

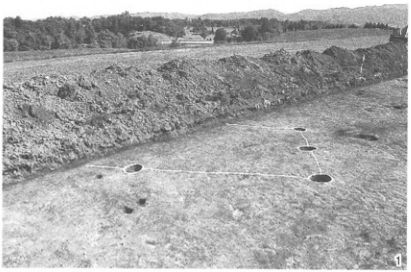
また、遺構に伴わない遺物として、弥生土器小片、サヌカイトチップ若干が出土した。

（坂本心平）

（註1）第2図Ｔ1～Ｔ5。安川豊史「西奥田遺跡発掘調査概要」『年報　津山弥生の里』第2号津山弥生の里文化財センター　１９９５年

（註2）岡本寛久「Ⅸ．確認調査概要〔1〕酪農試験場地内遺跡（大田遺跡）」『岡山県埋蔵文化財報告』２４　岡山県教育委員会　１９９４年

（註3）間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣『広江・浜遺跡』倉敷市教育委員会　１９７９年　図３３・４４～５５　他



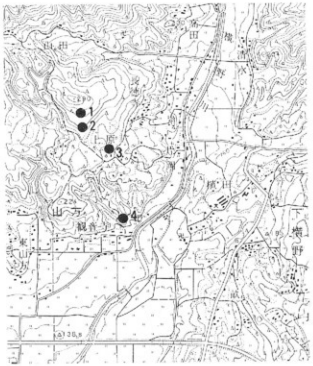
1. 建物址1（北から）

2. 土壙（陥し穴）1（東から）

ヒナメ塚１号墳

１．はじめに

ヒナメ塚１号墳は津山市上横野４３４１－１３番地に所在する。本古墳は１９８２年、津山市教育委員会発行「津山市遺跡地図」ＮＯ．１４７に相当するものである。このＮＯ．１４７は古墳２基よりなり、上原古墳群と命名されている。しかし、地元ではこの古墳はヒナメ塚と呼称されていることから、今回の調査を機に、北側の山側に位置するものをヒナメ塚１号墳（第１図１）、南側の尾根先端部に位置するものをヒナメ塚２号墳（第１図２）と改名することにする。



第1図　位置図（S=1:25,000）

また、ＮＯ．１４５は遺跡地図では弥生の散布地で、上原遺跡として登録されている（第１図３）が、この遺跡範囲の北側に隣接して円墳７基が分布する。１９６６年から６７年にかけて調査された弥生時代の土壙墓群である上原遺跡（第１図４）（註１）との混同を避けるため、これらを一括して弥生散布地を含んだ上原古墳群と命名することにする。

２．古墳の立地

標高２９０ｍの丘陵頂部から南に派生した尾根の中位に１号墳、先端部に２号墳が位置する。頂部からすぐ南にかなり急傾斜になっている。その傾斜が緩やかになった位置に１号墳が位置する。従って、１号墳は急傾斜の法面をバックに配したような立地環境にある。ちなみに、丘陵頂部と古墳との比高差は３０ｍを測る。

３．調査に至る経過

ヒナメ塚１号墳は横穴式石室をもつ円墳で、天上石、羨道部両壁石、外護列石が部分的に露出していた。地元の人の話によると「以前、掘ったことがある」と言うことであった。津山市においては、外護列石をもつ古墳はあまり知られてないことから、露出している石を中心に輪郭を検出し、測量図を作成することを目的に調査を実施した。

４．調査の経過

調査にあたり、平成８年３月３１日付け、津教委文第１３１号で文化財保護法第９８条の２に基づく埋蔵文化財発掘調査通知書を岡山県教育委員会に提出した。

発掘調査は３月２７日に開始し、３月２９日には終了した。測量は年度が替わった４月８日から４

月１１日まで実施した。

調査関係者は次のとおりである。

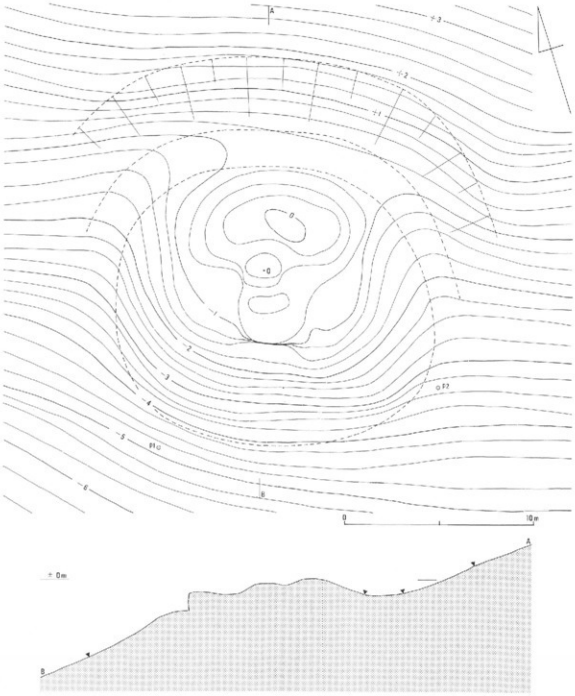
【調　査　担　当】　津山弥生の里文化財センター　行田裕美

【発掘作業従事者】　(社)津山市シルバー人材センター

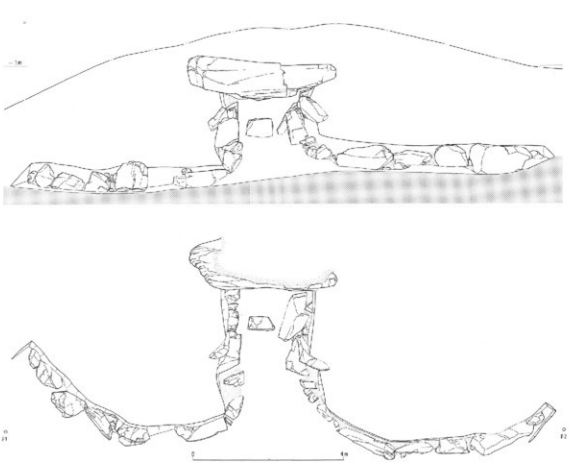
稲垣光男　稲垣裕史　梶尾嘉明　谷口末男　藤沢淳一郎　森二三夫

【測量作業従事者】　津山弥生の里文化財センター

坂本心平　青木睦子　野上恭子　岩本えり子



第2図　墳形測量図及び断面図（S=1:200）



第3図　外護列石立面図（上）、平面図（下）（S=1:100）

5．調査の記録

現況観察での所見

山側斜面を弧状に削り出し、周溝を形成している。周溝は山側の半分だけで、南の谷側は自然傾斜によって解消される。横穴式石室をもつ円墳である。

墳頂部の盛り土は全体に流失している。特に、南半は著しく、天上石が露出している部分が多い。天上石の隙間から石室内部を覗くことができるが、流入土でほんんど埋め尽くされている。

羨道部、外護列石を構成する石は部分的に露出している。

測量調査の所見

測量は墳丘の最高所を±0とし、25cm間隔で等高線を入れた（第2図）。その結果、東西17m、南北15mのやや偏平な円墳になることが判明した。山側には底面での幅約2mの周溝が半円状にめぐる。北側周溝の上端から底面までの比高差は1．5mを測る。南側墳端から墳丘最高所までは4m強を測る。

石室・羨道・外護列石（第3図）

石室は調査してないため、構造規模は不明である。ただし、無袖式の石室の場合だと、幅が1．5m強、高さも同じ位ぐらいの規模になることは想定することはできる。

羨道部についても石室同様、多くを語ることはできない。

外護列石は天上石の南端から2．5m付近から湾曲し始める。直線での長さは東側が6．5m、西側が5．5m強を測る。外護列石は1段で横口積みである。列石は図示した範囲内で納まり、これより奥には続かない。従って、前面にだけ採用されたものである。

出土遺物

羨道部付近の石を検出中、陶棺片が若干量出土した（図版３－２）。土師質亀甲形陶棺の破片である。他には土師質土器の小片が１点出土しただけである。

６．おわりに

津山市内では外護列石をもつ古墳は柳谷古墳（註２）が唯一知られているだけである。この古墳は６世紀末から７世紀初め頃の径１０ｍにも満たない小円墳である。埋葬に陶棺は採用されていない。墳丘が全体に歪んでおり、遺存状態は良くないが、谷側の墳端部に数個の円礫がかろうじて残っていた。

ヒナメ塚１号墳の所属時期は明らかではないが、陶棺をもつことから柳谷古墳とそう時期が隔たるものではあるまい。そうすると、６世紀末から７世紀初頭を前後する時期に外護列石をもつ古墳築造の技術が津山市内においても認められるということになる。しかし、このことは今日までの調査成果に基づく限り、決して普遍的なものではなく、逆に特異な現象ととらえるべきであろう。

最後に、本古墳の調査に快く承諾して頂いた地権者の高山佳宣さんに心より感謝申し上げおわりとする。

（行山裕美）

（註１）近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史』第１８巻考古資料　１９８６年
（註２）保山義治「御谷古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２４集津山市教育委員会　１９８８年

1. 調査前の状況

2. 調査風景

1. 調査終了後

2. 東外護列石

1. 西外護列石

2. 出土円棺片

津山の弥生土器２（甕形土器・高坏形土器）

中山　俊紀

前期の甕形土器

津山では、天神原遺跡、高橋谷遺跡、京免遺跡等で前期の土器が発見されている。いずれの土器も前期後半に属するもので、前期前半に遡るものは、今のところ発見されていない。

各遺跡で発見されている甕形土器の基本的な形は、縄文土器以来の深鉢形を呈する。これらは口縁部断面が如意形を呈するもの（Ａ）と、断面三角形の粘付口縁帯を有するもの（Ｂ）の二種に大きく区分される。Ａは、口縁部に沈線を巡らすものと無文のものの２種があり、Ｂはほぼ例外なく沈線を巡らしている。この沈線文は、天神原遺跡出土のものでは２～３条で、幅の太い線をもつものが含まれ、京免遺跡出土のものは、多条化して１０条前後を巡らしている。

継続形集落である高橋谷遺跡出土のものには、さらに本数の多いものもあり、沈線の多条化は、おおむね時期的推移を示しているとみてよい。

中期の甕形土器

深鉢形の甕は中期前葉までみられるが、口縁部下の沈線文が櫛状の工具によって施文されるように変わる。高橋谷遺跡では、この櫛描文の条痕に櫛の目の荒い沈線文風仕上げのもの少数と、櫛目の細かいいわゆる櫛描文風のものがある。前期からの施文の変遷に位置づければ、前者は櫛描文化した甕のなかでもより先行することが推測されるが、今のところ資料点数は少なく、現状でははっきりしない。

中期前葉から中葉にかけ、胴部が卵形を呈する弥生形甕（Ｃ）が出現する。Ｃは、法量で大（Ｃℓ）中（Ｃｍ）に区分できる他は、いづれもくの字口縁を呈する単純な形態のもので、施文及び口縁端部のそりや、わずかな肥厚によって特徴の差が認識されるにすぎない。

中葉の後半には、この甕に加え、口縁部を上下に拡張し、端面に凹線を巡らす弥生形甕（Ｄ）が追加され（Ｄℓ、Ｄｍ）、後葉になると甕Ｃが衰退し、甕Ｄが優勢となる。

後期の甕形土器

後期前葉は、中期末の様態を受け継ぎ、甕Ｄが主流を占める。また、小形の甕Ｄｓが普遍化する。前葉末から中葉になると、中期以来の系統変化を主要因として成立する二重口縁の変作形とも呼ぶべき形態の甕が形成されてくるとともに、山陰の九重式の影響を受けた二重口縁で、口縁外面に櫛描平行沈線文を巡らす出雲形甕が、特定の遺跡で集中して発見されるようになる。

後葉になると、播磨や但馬地方の影響とみられるタタキ成形を特徴とする播磨・但馬形甕が、市内東部を中心に目だちはじめ、さらに後葉から終末期には、山陰地方に広くみられるような薄手のシャープなつくりで、肩部に半行櫛描文や櫛描波状文を伴う伯耆、因幡形甕が多く発見されるようになる。

なお、細部は煩雑になるため割愛するが、外来要素により区分した甕も、現実にはそれぞれの相互変容の結果、多様な変異群として存在するということは注意しておきたい。

中期の高坏形土器

中期前葉以前の高坏形土器は、断片的な資料しかないため、中期中葉以降の高坏について概観する。

中期高坏は、椀形坏を基本とする。口縁部の形態により、端部肥厚形と、その亜形とみられる端部T字ないしはイの字形断面を呈する端部拡張形、鍔形高坏、および端部逆L字形高坏に大きく3区分される。

端部肥厚形高坏は、中期後葉に形態分化がおこり、坏部が強く屈曲するものが出現する。この分化と同時に、端部肥厚形高坏及び鍔形高坏に大形個体が出現する。次回にふれる器台形土器の大型化とともに、高坏形土器の大型化は津山地方の中期後葉土器の一特色となる。

後期の高坏形土器

小形の端部肥厚形高坏のうち、坏屈曲の強い個体は後期に継承され後期初頭の高坏の主流となるが、若干の変異を生みながら、後期前葉には姿を消していく。

相前後して、坏中位から二段に立ち上がる二段坏形高坏が出現し、以後後期から古墳時代にいたるまで一貫した主流高坏となる。

また、遅くとも後期中葉には皿形高坏が出現し、後期末には、伯耆・因幡形高坏が出現する。

掲載土器出典

「天神原遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7	岡山県教育委員会	1975年
「高橋谷遺跡」	1975～77年にかけ津山市教育委員会が調査。報告書未刊。		
「京免・竹ノ下遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集	津山市教育委員会	1982年
「高本遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8	岡山県教育委員会	1975年
「沼E遺跡II」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集	津山市教育委員会	1981年
「下道山遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17	岡山県教育委員会	1977年
「楢山遺跡群II」	久米開発事業に伴う文化財調査委員会		1979年
「大山十二社遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集	津山市教育委員会	1981年
「一貫東遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集	津山市教育委員会	1993年
「二宮遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28	岡山県教育委員会	1979年
「金井別所遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集	津山市教育委員会	1988年
「押入西遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3	岡山県教育委員会	1973年
「領家遺跡」	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8	岡山県教育委員会	1975年
「ビシャコ谷遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集	津山市教育委員会	1984年
「一貫西遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集	津山市教育委員会	1990年
「野村岳尾遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集	津山市教育委員会	1995年
「大畑遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集	津山市教育委員会	1993年
「西古田遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集	津山市教育委員会	1985年
「小原遺跡」	津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集	津山市教育委員会	1991年
安川豊史「美作国府跡出土の弥生土器」「古代吉備」	第17集	古代吉備研究会	1995年

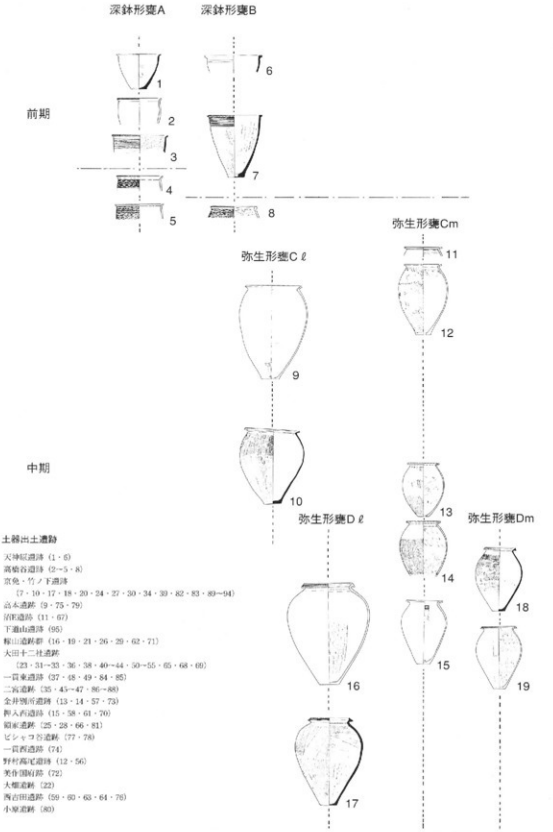


図1　前・中期の甕形土器系統想定図（縮尺約1／16）

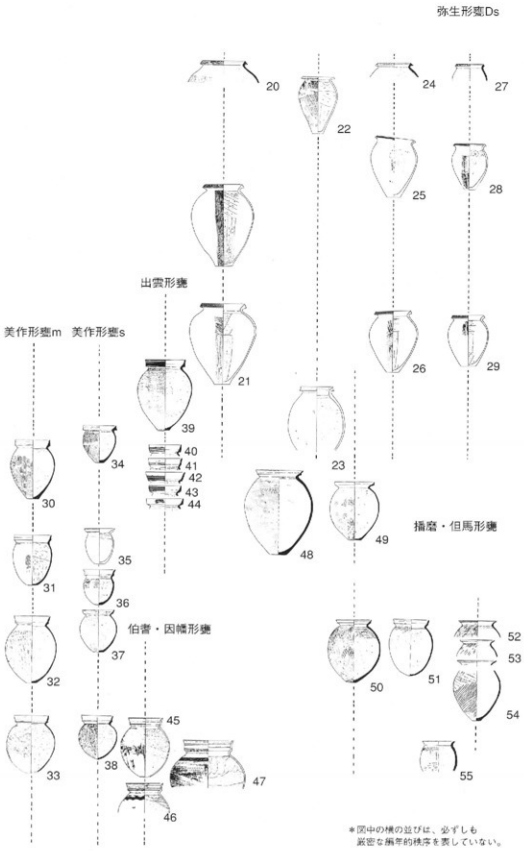


図2　後期の壺形土器系統想定図（縮尺約1／16）

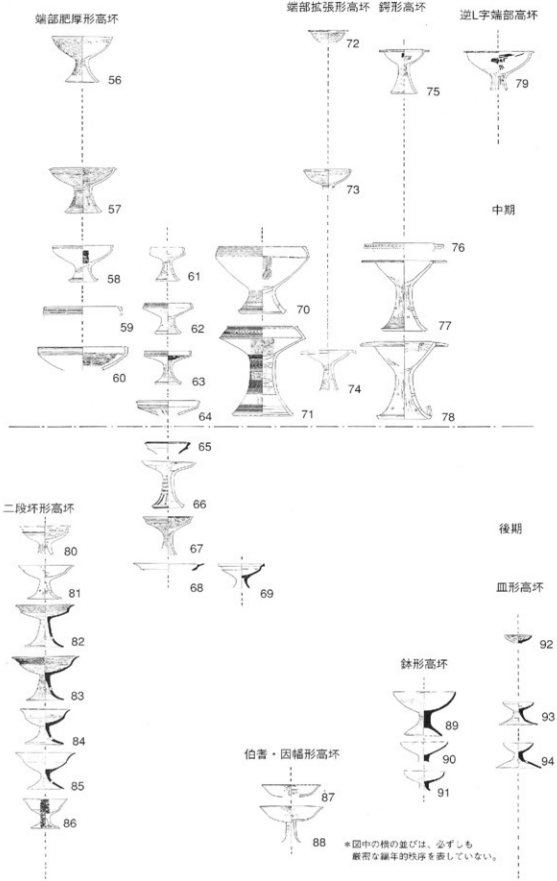


図3　高坏形土器系統想定図（縮尺約1／16）

有孔砥石考

行田　裕美

1．はじめに

１９８５年の初夏は津山中核工業団地の造成に伴う一貫西遺跡の調査を行っていた。筆者が調査担当で作業員１５人と苦楽を共にしていた。ある日、この中の一人の稲垣光男さん（津山市西吉田１４１－２）が腰のベルトに偏平な有孔砥石をぶら下げておられた。まさに弥生時代の情景を今に見るような思いがし、早速、昼の休憩時にお願いして写真を撮らせていただいた（第１図）。一貫西遺跡の調査終了後も別の遺跡の調査が継続したので、足掛け３年数カ月にもわたる調査でのお付き合いの中で、後にも先にもこの砥石を見たのはこの日限りであった。稲垣さんはこの日、発掘調査に出る前に早朝から砥石を持参し草刈りに行かれ、そのまま現場に来られたのであった。研ぐ時は水の代わりに露、露のない日中は唾を使ったということであった。

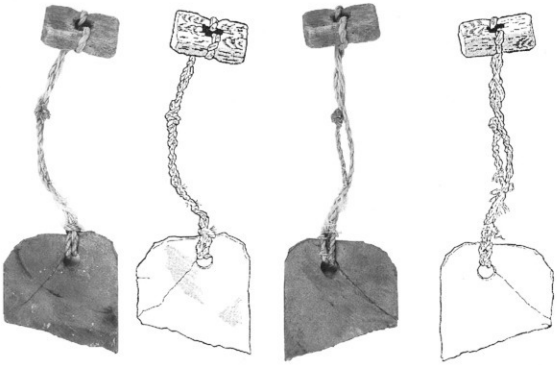
あれから１０年後の１９９５年７月、西吉田北遺跡の調査で再び稲垣さんと苦楽を共にすることになった。１０年前の砥石の話をしたら、「今でもあるでぇ。いりゃあげるでぇ。」ということで、すんなり譲り受けることになった。

これを機に、稲垣さんの現代の有孔砥石と弥生時代の有孔砥石を考えてみたい。

2．稲垣さんの有孔砥石

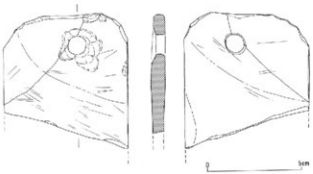
稲垣さんの有孔砥石は現存最大長７．２㎝、幅６．１㎝、厚さ０．７㎝である。現存としたのは下端部が折れて欠損しているからである。折れ口には接着剤のボンドが付着している。現存部も一度折れてボンドで接合した痕跡がある。砥面には鎌を研いだときの錆が付着し、部分的に褐色に変色している。中央部上位には径０．９㎝の孔が穿たれている。穿孔は一方向から行われている。この孔に紐を通し、

第１図　腰に砥石をぶら下げた稲垣さん（1985年初夏）



第2図　稲垣さんの砥石（スケッチ:家元弘子）

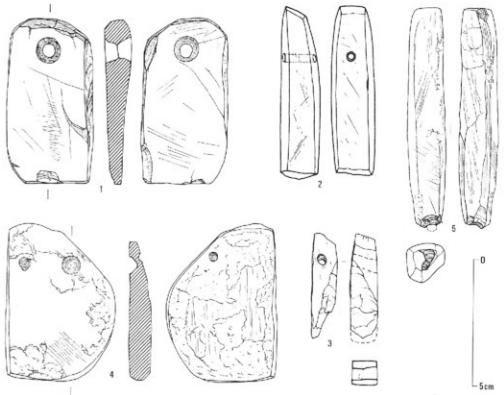
紐の先端にはベルトに挟み固定するための角材が取り付けられている。角材は長さ４．３㎝、幅２．３㎝、厚さ１．３㎝で中央部に径０．９㎝の穴が開けられている。角材の中央部の角は紐を取り付けやすいように決られている。他の角もきれいに面取りされている。砥石と角材との紐の長さ１２．５㎝である。砥石の材質は砂岩のようである。紐は化学合成繊維、角材はラワン材である。



第3図　稲垣さんの砥石実測図（S=1:2）

3．弥生時代の有孔砥石

一般的に砥石と総称されるものは大きさ、形態、石材等非常にバラエティーに富み、住居址等からかなりの量が出土する。大きさは人頭大から２・３㎝前後のものまで多様である。大きなものは置砥石、小さなものは手砥石であろうか。形態はハンバーグ状を呈するもの、角柱状のもの、円柱状のもの、板状のもの、孔を有するもの等々である。石材も砂岩、頁岩等多種にわたる。しかし、これら多種多様にわたる砥石は従来、石器の器種として取り扱われることがなく、これまで大きさ、形態、石材等に基づく議論がなされなかったように思う。このことはそれ自体が製品ではなく、常に研磨という行為の受け身の所産品であり、研磨の対象物である鉄製品の器種の違いによって自ずから形状を変えなければならないという宿命を負わされていたことによるものと考えられる。従って当然のことながら、不定形なものが多く、それ自体では型式学的方法による考古学の議論の対象になりにくかったということができるかも知れない。



第4図　弥生時代の砥石（S=2:3）

これら多種多様の砥石の中で、津山市内出土の有孔砥石を集めてみたところ、案外少なく確実に孔を有するものは第2図の1～3の3点しか見当たらなかった。有孔のものに限定すると非常に数が限られていることに今更ながら驚かされた。

1は押入西遺跡（註1）の弥生時代中期後半の住居址から出土した。最大長6．5㎝、最大幅3．4㎝、最大厚1．1㎝の板状のものである。中央部上位に径0．5㎝の孔が穿たれている。穿孔は両面から行われている。石材は頁岩と思われる。

2は大田十二社遺跡（註2）の弥生時代後期後半の住居址から出土した。最大長6．7㎝、最大幅1．7㎝、最大厚1．6㎝の角柱状のものである。下端は欠損しているが、他の面は全て砥面として使用している。中央部やや上位に径0．3㎝の孔が穿たれている。穿孔は1方向から行われているようである。石材は頁岩である。

3は向林遺跡（註3）の弥生時代後期末の住居址から出土した。最大長4．1㎝、最大幅1．1㎝、最大厚1㎝の角柱状のものである。中央部上位に径0．4～0．5㎝の孔が穿たれている。穿孔は両面から行われている。石材は不明である。

他に参考例として穿孔途中のもの（4）、穿孔過程で欠損したもの（5）をあげた。4は板状の素材の表裏両面から穿孔しかけて途中でやめたものである。5は棒状の先端部に表裏両面から穿孔しようとして、先端が欠損したものである。いずれも押入西遺跡の弥生時代の中期後半の住居址から出土したものである。これら穿孔途中もの、欠損したものを含めても有孔砥石の数はそんなに増えるものではない。

4．有孔砥石考

まず、孔の機能であるが、稲垣さんの所持例を見ても明らかなように、紐を通すためのものであったことは間違いないと思われる。民俗事例を無批判に適用することを肯定するわけではないが、本例

の場合、疑う余地はあるまい。では、この紐はどのような役割を果たしたのであろうか。稲垣さんの事例では、先端に角材を取り付けて腰のベルトに挟み、ぶら下げるというものであったが、弥生時代の出土例もその様であったかどうかは証明する術はない。しかし、あくまでも紐を通すという行為がある以上、腰にぶら下げるか、手に持つかは別にしても携帯するためのものであるということは想定してもよさそうである。この想定が許されるなら、有孔砥石は携行品であるということができる。

携行品である以上、重量が問題になってくる。上記3例と稲垣さんのものを加えた4例の中では、稲垣さんのものが最も大きいのであるが、総重量は50gにも満たない。この重さだと携行にはなんら影響はなく、むしろ所持しているのを忘れるぐらいの重さである。従って、有孔砥石は小さく、軽量であるということができよう。

次に、研がれる側、すなわち鉄製品についてふれることにする。その前に、津山市内での弥生時代の鉄製品の出土例を確認しておこう。確実に器種の判定できるものは、斧4点(註4)、ヤリガンナ8点(註5)、鎌2点(註6)の3器種、計14点である。時期は中期後半から後期末までわたる。

さて、この3種の鉄製品と有孔砥石を結びつける作業を進めて行かなければならないのであるが、これは中々至難の業である。と同時に想像の域をでない実証性に乏しいものである。しかし、あえて個々に検証してみよう。

ヤリガンナは木材加工の細部調整に使用される工具であるから、集落内で使用されたものと考えられ、研磨も当然その場所で行われたであろう。

鎌は特殊用もあるかもしれないが、基本的に弥生時代のものは武器と考えられている。武器は戦闘用である。その場で研磨していては間に合わないし、錆びているような状態では効果も少ないであろう。

斧には伐採用と加工用がある。伐採用は集落外の使用であり、加工用は集落内での使用であろう。携行品ということを考慮した場合、伐採用の斧が他の2器種と比較して有孔砥石の対象となる可能性が高くなる。しかし、斧を有孔砥石という手砥石で研ぐ効果はあまり期待できない。斧は住居址の床面によく見られる大きめの置砥石の方が効果的であろう。

5．おわりに

砥石の大きさ、形態、石質の相違は対象相手の鉄製品に規制される。津山市において、弥生時代の鉄製品は残念ながら斧、鎌、ヤリガンナの3器種しか出土していない。しかし、前項でみてきたように鉄製品と有孔砥石のセット関係を認めることはできなかった。このことは現在の感覚で弥生時代の研磨作業を見た結果であろうか。いずれにしても、鉄製品と砥石が出土しているという事実がある以上、証明するすべはないが、両者が有機的に結び付いていた事は間違いあるまい。

以上、長々と述べてきたが、弥生時代に用いられていたものと同様の有孔砥石が現在も脈々と生きながらえていたという事実関係を提供していただいた稲垣さんに感謝しまとめとする。

(註1) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。
(註2) 津山市教育委員会『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集1981年
(註3) 津山市教育委員会『向林遺跡・中鎌田境墓』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第29集1989年
(註4) 鯉迫遺跡、ビシャコ谷遺跡、西古田遺跡、大開遺跡で各1点ずつ出土している。
(註5) 大山十二社遺跡で4点、沼遺跡、二宮大成遺跡、上郡遺跡、稲荷遺跡で各1点ずつ出土している。
(註6) 小原遺跡、大畑遺跡で各1点ずつ出土している。

医王山城採集の瓦

平岡　正宏

1．採集のいきさつ

１９９４年３月１６日、津山市綾部在住の梶岡定知氏と梶岡辰男氏の案内で弥生の里文化財センター行田裕美と平岡正宏が医王山城の踏査をおこなった。この城は石垣を持った山城であり、また文献上にも度々登場することから注目されていたが、何分険しい山上に位置するためなかなか現地を実見する機会に恵まれなかった。また、城跡には瓦が散乱しているという事だったので、その瓦によって医王山城の実態の一端が明らかになればと思い、瓦の採集をおこなった次第である。

第1図　医王山城位置図

2．医王山城について

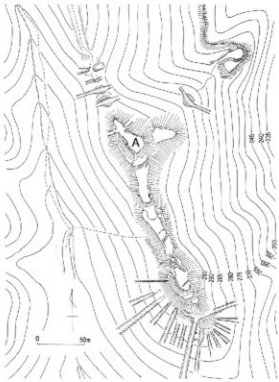
医王山城（祝山城・岩尾山城とも呼ばれる）は津山市街地の北東部、吉見に所在する（第１図）。城の東には加茂川が流れ、西側は深い谷が入り込んでおりまた北端と南端は堀切で画されており天然の要害に立地している。

築城の時期については定かではなく、上述是次が築城したとも言われている（註１）が、建武以降、南北朝期の美作での山名氏と赤松氏の抗争の中で、山名氏の有力な支城として歴史上に登場することから、遅くともこの頃までには城が築かれていたことは間違いない。

天文元年（１５３２年）、出雲の戦国大名尼子経久の美作進攻の時に医王山城は尼子配下の三好安芸守によって占拠された。しかしながらまもなく三好安芸守も浦上宗景によって城を奪われた。その後、尼子との間に激しい争奪戦が繰り広げられ、尼子氏の滅亡後は宇喜多直家の支配下にあったが、永禄９年（１５６６年）前後には毛利氏の進攻によりその支配下にあったようである。以後医王山城を巡って毛利氏と宇喜多氏の攻防が続いたが、天正１０年（１５８２年）に毛利氏と羽柴秀吉の間に和議が成立したことにより医王山城は開城、廃絶したものと考えられる（註２）。これらの記録から考えて本城の存続期間は１４世紀半ばから１６世紀末頃と推定できる。

医王山城の縄張りについては、八巻孝夫によって調査が行われている（第２図・註３）。それによると、ほぼ南北に延びる尾根筋に沿って北側の最高所に本丸を、そこから南へ細長い小規模な郭をいくつか連ねる連郭式の配置を持つ。また北の尾根伝いに四本の堀切りを、北東側の尾根にも堀切りを、さらに南側にはL字状の堀切りと畝状空堀群を配している。千田嘉博の横堀と畝状空堀群の組み合わせによる分類法では横堀と組み合わない１類に分類される（註４）。新しいタイプの２類が導入されるのは早くて永禄年間（１５５８～１５７０年）、一般には天正年間（１５７３～１５９２年）に入ってからと

されるため、1類の年代はそれ以前に求められ、この点からも前述の文献による医王山城の存続期間はほぼ妥当であることが認められる。



第2図　医王山城縄張り図（八巻孝夫作図を再トレース）

3．採集遺物の概要

本丸にはかつて大量に瓦が散乱していたらしいが、城を訪れる人々がかなりの量を持ち去っており、現在では採集できる瓦は大部分が小破片であり時期の決定が比較的容易な軒瓦は皆無に等しい。採集できた瓦は軒丸瓦2点、平瓦3点、丸瓦3点の8点である。以下、順を追って概要を述べることにする。

軒丸瓦（第3図の1～2）

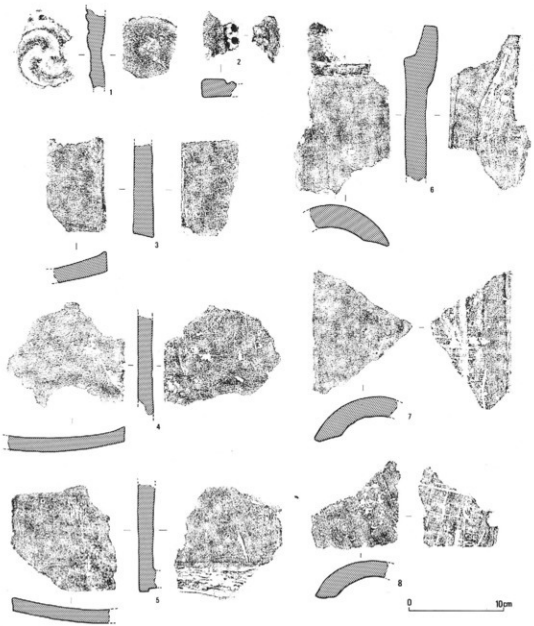
いずれも全体の半分以下の破片であり、全体の形は不明である。1は軒丸瓦の巴の部分である。表面は青灰色、内部は淡灰色である。巴の頭部は小さく、尾は左回転で半周程度以上伸びているようである。珠文は径が9～10㎜程度でその間隔は2㎜と狭く、密に並んでいるようである。また瓦当裏面は中心部が窪み厚さは11㎜だが、その他の部分は15㎜程度である。珠文の裏の部分にはわずかに丸瓦との接合部分が認められる。2は周縁と珠文の一部である。色調は表面・内部ともに淡灰褐色である。周縁は幅24㎜、高さ5㎜であり、その内側に径8～9㎜の珠文が3㎜程度の間隔で並んでいる。周縁の部分で厚さは20㎜程度である。

平瓦（第3図の3～5）

平瓦についても全体の形のわかるものは無い。3は平瓦の広端の破片である。色調は淡褐色から灰白色である。凸面凹面、さらには広端面・側縁面までナデにより仕上げている。凹面の側縁端はややつまみ上げられた様な形態を示す。厚さは17㎜程度である。4は表面は暗灰色、内部は淡褐色を呈する。凹面はナデ、凸面は浅く削っているようである。この瓦も凹面の側縁端部をややつまみ上げたような形状を呈している。厚さは15㎜程度である。5は軒平瓦の瓦当面の剥離したものである。色調は表面が暗灰色・内面は淡灰色である。平瓦の部分は凹面と側縁面はナデ調整、凸面は未調整のようである。瓦当面との接合は凸面広端に五条程度の沈線を施し、接合している。瓦当の周縁がわずかに残存しているがその幅は約10㎜、高さは3㎜程度である。

丸瓦（第3図の6～8）

丸瓦もまた全形のわかるものは無い。6はわずかに玉縁部を残す丸瓦である。表面は灰色から灰白色を呈し、内部は灰白色である。凸面及び玉縁部分はナデ仕上げ、凹面の調整はコビキ痕が横筋に均一となって現れるコビキB手法で（註5）、側端面のほとんどを大きく面取りし、端面を5㎜程度しか残さない。丸瓦部分の厚さは約20㎜である。7は表面は暗灰色・内部は淡褐色を呈する破片である。6と同様に凸面はナデ仕上げ、凹面はコビキB手法であり、側端面のほとんどを大きく面取りする。端面は5㎜程度しか残さない。丸瓦の厚さは20㎜程度である。8は表面・内面ともに淡褐色を呈する破片である。これも凸面はナデ仕上げ、凹面はコビキB手法で側端面は6・7とは異なり半分



第3図　出土瓦実測図（S=1:4）

程度を浅く面取りしている。端面は１０㎜程度残る。

銅銭

また、これらの瓦とは別に医王山城で採集した銭が一枚ある。採集場所は医王山城の最高所・本丸と考えられている場所である（註６・第２図のA）。直径約２２㎜で表面・裏面ともに摩耗が著しく銭種は判然としないが、銭の左は「寶」の字であり、右の字は「平」・また下の字は「元」と読めることから、「咸平元寶（かんぺいげんぽう・北宋・９９８年）」あるいは「治平元寶（じへいげんぽう・北宋・１０６４年）」の可能性が高い（註７）。

第4図　出土銭（S=1:1）

4．まとめ

中世城郭においては一般的には瓦は用いられず、屋根はもっぱら板葺・茅葺などにすることが絵画資料などからうかがえるという（註８）。また、礎石建物・石垣・瓦葺建物のセットは織豊系城郭の特徴と考えられている（註９）。医王山城においては瓦がどの程度の量使用されていたかについては不明であるものの、部分的に石垣を持っており、礎石の存在が明らかではない以外は織豊系城郭の特徴を備えており、その関係が注目される。

本稿で遺物として紹介した瓦については、近年その製作技法により詳細な年代の検討が行われているが、なかでもタタラ（粘土を直方体に積みあげたもの）からコビキ（瓦の大きさに応じた粘土板を切り取ること）する道具の違いによって年代的な位置づけが行われている（註１０）。すなわちコビキ痕跡が無数についたいわゆる糸切状のコビキＡと胎土中にある砂粒の移動したあとが横筋になって現れるコビキＢに分類することができ、コビキＢに変化する時期は天正１１年（１５８３年）頃と考えられている。医王山城から出土した丸瓦についてはコビキＢ手法によっており、天正１１年以降のものと考えられる。

この年代は城の縄張りからみた時期（１６世紀半ば以前の築城）とは異なり、文献によって推測された医王山城の開城の時期（天正１０年・１５８２年）よりも年代が降ることになる。これはどういうことだろうか。考えられることは城が天正１０年以降も何らかの形で存続しており、その前後の時期に医王山城の最終的な形として石垣が構築され、建物に瓦が葺かれたという事であろう。それ故、石垣が縄張り全体の中で見ればごく一部に限られており、瓦の散布についても最高所の郭に限られているものと考えられる。しかしながら資料の制約からここではこれ以上論を進めることはできない。

津山市内の山城については縄張りからの研究はあるものの（註１１）、その実態の考古学的な研究はほとんどない状態である。本稿が山城の実態の解明の一助になれば幸いである。

註１　『日本城郭大系岡山』　新人物往来社　１９８５年による。

註２　このあたりのいきさつについては前掲註１文献及び村田修三編『図説中世城郭事典三』（新人物往来社　１９８７年）による。

註３　前掲『図説中世城郭事典三』

註４　千田嘉博「中世城郭から近世城郭へ－山城の縄張研究から－」『月刊文化財第３０５号』１９８９年、なお、「堀切り」とは尾根を切断する堀で、「横堀」とは曲輪の縁に造られた等高線に沿って伸びる堀を指す。

註５　森山克行「瓦」「高槻市文化財調査報告書第１４冊　摂津高槻城本丸報告書』高槻市教育委員会　１９８４年

註６　この出土銭は津山市吉見在住の早瀬氏により清掃作業中に発見されたものであり、氏のご厚意により津山市に寄贈していただいたものである。

註７　「日本出土銭総覧」兵庫埋蔵銭調査会　１９９６年

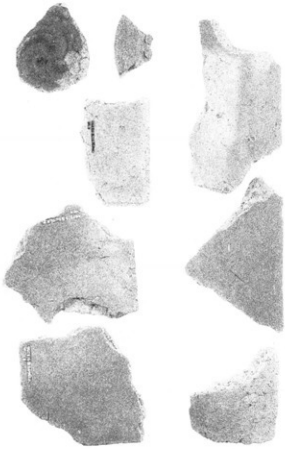
註８　十山公仁「瓦からみた中世城館」『考古学ジャーナル３５３』　１９９２年

註９　中井　均「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社　１９９０年

註１０　前掲註５

註１１　池田誠「美作国における中世城郭の一考察」『中世城郭研究』　１９９４年

医王山城遠景



採集瓦類

採集銭（表）

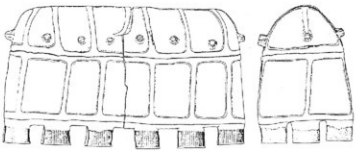
採集銭（裏）

亀甲形陶棺の形について想うこと

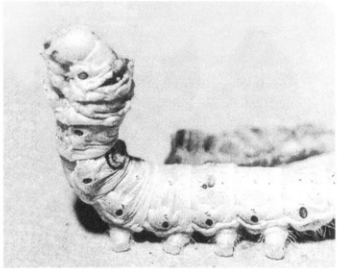
岩本　えり子

陶棺は大きく亀甲形と家形に分類されています。この中の「亀甲形陶棺は何をモデルに製作されたのだろうか」という疑問は以前から抱いていました。

島根県立八雲立つ風土記の丘資料館を訪れたのは昨年の3月の事でした。館に入ると、まるで生きもののように横たわっている1つの陶棺が私を釘付けにしてしまいました。この陶棺は渋山池1号横穴墓出土のものでした。考古学的には素人の私ではあるが、通常津山市周辺で出土するものとは形、文様、製作手法など全く異質な感じを受けたのです。すなわち、幅が狭く細長い形。棺の底は平らではなく、丸みをおびている。外面は竹を輪切りにし、その断面を押し付けた円形文で飾っている。作り方は粘土ひもを積積みするのではなく、立てた状態で輪積みで作られており、小口側に円錐の充填痕跡が見られました。さらに驚いたことには脚がすべて分離しているのです。本来、脚は棺本体に接続しているものなのに、切り離して脚だけ別に製作されていました。ちょうど植木鉢のようでした。



コウデン2号墳出土陶棺（註4）



カイコの幼虫（註5）

私はこの陶棺を見て咄嗟にカイコ（蚕）を想像しました。芋虫のような形が似ていること。植木鉢は足を、円形の竹管文は斑紋、突帯は環節を表現したものであろうと実感したからです。通常の亀甲形陶棺の場合は蓋の突起が斑紋と考えられます。では何故、死者を葬る際の入れ物にカイコを選んだのでしょうか。被葬者とカイコひいては養蚕・絹生産とが結び付くのでしょうか。これについて回答を持っているわけではありません。素人の自由な発想をお許しいただき私なりの考え方を述べさせていただきたいと思います。

古事記・日本書記には「神の頭や眉から蚕、桑、繭が化生した」記事が見られます。さらに遡上れば、魏志倭人伝にも蚕桑（養蚕の事）が記載されているという（註1）。これらのことから少なくとも陶棺の消長期間である6世紀後半～7世紀を中心とした時期には養蚕、ひいては絹生産があったことが考えられます。

次に陶棺の分布の問題との関係について触れたいと思います。陶棺の分布は岡山県それも津山を中

心とした美作地方に集中しています。一方、桑の自然分布を見ると、日本列島の中で中国地方にだけケグワという種類のものが分布しています。後は北海道から九州までヤマグワという種類のものにおおわれていると言われています（註２）。

また、養蚕に関係する地名も馬桑、桑上、桑下、養野、桑瀬、桑原、桑野、錦織と多く残っています。

これらのことから、陶棺と養蚕ないし絹生産の関係が多少なりとも言えるのではないかと思います。しかし、確実に陶棺に伴って絹が出土するなどの客観的な事例がない以上、あくまでも推測の域でしかありません。

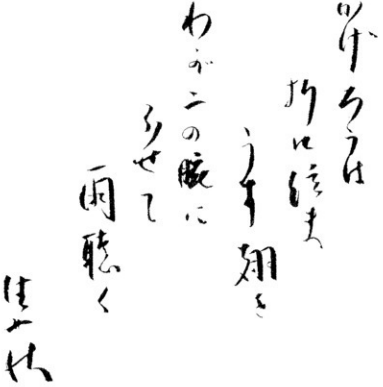
折口信夫は、「たまごの占い言葉はかひ（貝）である。また蚕にも此意味があったのだろうと思はれる。物を包んで居るのが、かひで、丁度もなかの皮の様に物を包んで居るものを言うのである。此かひは密閉してあって、穴のあいて居ないのがよかった。其穴のあいて居ない容れ物の中に、何処からともなく這入つて来るものがある。其這入つて来るものがたましいであって、此中に或期間を経過するとたましいが成長して、其かひを破って出現する」と言っている（註３）ように死者の魂の再生復活を考えていました。

カイコは何回も脱皮して成長し、マユ（繭）をつくりサナギ（蛹）となる。最後には羽化してカイコガとなって飛び立って行く。当時の人々はこのカイコの成長発展過程にあやかって、死者をカイコを模した入れ物（陶棺）に入れる事によって、生命（魂）の再生復活を祈ったのではないでしょうか。

従来、鉄生産との関連でとらえられがちだった陶棺の性格について、養蚕・絹の視点から見てみました。家形の問題、分布の問題、時期の問題等々解決しなければならないことがたくさんあると思いますが、私の能力の範囲を越えます。

以上、私の感性にまかせた実感を述べさせていただき終わりとします。

（註１）ものと人間の文化史『絹Ⅰ』伊藤智夫 法政大学出版局
（註２）　　同　上
（註３）折口信夫「剣と玉と」『折口信夫全集』第２０巻 中央公論社
（註４）村上幸雄「稼山古墳群」『稼山遺跡群』２　１９８０年より引用
（註５）佐々木　崑『カイコの一生』フレーベル館１９９２年より引用



かげろうは折山佰犬　うすき翅を　わが二の腕に
ふせて　雨聴く

シセムト、ヌスマクシラニ、ヒメナソビスモ」と歌ってパッと消える。「いま何と言った？」ときくと、「何ものは言はない、歌っただけだ」と少女が答えたところが出てくるんです。そういう点で、崇神紀は大事です。歌の律文というのは外界で汚された言葉ではなく、リズムのある神聖なもので神との問答の時に使うものでした。崇神天皇紀に書かれておりますから、歌の発生はそれなんだというふうに先生は言われております。

そのように歌というものは神を呼ぶものですから、根本として雑歌が一番大切であるというのは当然です。

ミマキイリヒコの歌は、玉の緒が盗まれたというものですが、昔は魂の緒というものがあって、鎮魂祭の時に四人方で結んで、穴を掘って埋めて安置していたものだそうです。のちにそれを祠に入れて魂を結んで安置した。それがだんだん世の中が変わって心の枕詞になります。魂の緒も言葉使いが変わってくるんです。けれど、昔はそれを盗まれれば殺されるということの暗示だったわけです。そのように神と魂というものは、見えるもので、もっとも人間くさいものでした。

おわりに

最後に先生の死ぬ前の遺稿の歌を一つ紹介します。

「人間を深く愛する神ありて　もしもの言はゞ、我の如けむ」という歌です。この歌は死ぬ前に作ったものですから、みんなあまりひどいことを言わないんです。だけど、生きている時にあんな事を言ったら、多分、だいぶやっつけられたと思うのです。「自分ほど人間を猛烈に愛したものはいないだろう。この猛烈さというものは神なんだ」という歌なんです。その他もろもろ、猛烈な人でありました。確かに猛烈な人だったから、ああして一匹狼頑張って生きぬいたんでしょう。そして、ついに最後まで妻をめとりませんでした。亡くなった時、ずいぶん沢山の人がお集まりになりました。「へえー、先生こんなに偉かったのか」弟子連はみんなそう思いました。

中でも特に、左翼の共産党員だった作家の中野重治さんは非常に先生を尊敬しておられました。そして、「この人の学問をもっと数学的にきちんと整理しておかないとわかりやすく、みんなに敷衍してくれる人はいないものだろうか」という追悼文を述べておられます。

皇国史観の凝り固まりだと思われていた折口信夫が、何故、中野重治にあんなに愛されたのかという疑問は、今も私の脳裏から離れません。まだまだ折口信夫について理解されていない部分がたくさんあると思います。先生に指導を受けた最後の弟子として、少しでも折口学をみなさんに解っていただくためにこれからもずっと研究を続けていきたいと思っております。おわかりにならないことが多かったかもしれませんが、時間がまいりましたので、終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

（本稿は一九九六年二月二四日、岡山県津山市で開催された
第十四回津山市文化財調査報告会での講演録である）

例えば、万葉集を考えてみましょう。雑歌と言いますと、今では色んなものをそこの中にほうり込んである乱雑な歌集、そういうふうに受け止めてしまいます。ところが先生は「万葉集の中で一番大事なのは雑歌である」と言います。なぜか？万葉集の雑歌は呪歌である。宮廷の呪歌である呪文の歌と考えるのです。これしか言わないから、それでおしまいになってしまうんです。だけど「ここから先はあなたが調べなさい」という声が私には聞こえるわけです。

そうしますと、雑という字を一生懸命調べるわけです。中国の「廣韻」という字引きで、雑という字を引きます。雑という字はどんな意味があるかといったら「市也」「集也」「穿也」「穿也」と書いてあります。「市也」この変な言葉を引きますと、「周也」「遍也」とでてきます。これは「巡る」「巡るなり」とあります。それで人が集まって巡り巡ることがわかります。次はあの「穿也」獣へんの字です。これはキャ・と声を出すことです。奇声を発す。次に穿つことです。ですから、たくさんの人が市に集まって来て、練り歩いて奇声を発し、乱婚に入るという意味になるのです。乱婚、これは歌垣の意味になります。それで呪文の歌を歌って、みんなが神憑って乱交に入るという意味がここに入っております。ですから万葉時代の人達はそれを知っていて、雑歌を一番大事な巻頭に組んでいます。だけど、今の人は雑歌をしらべないからわからない。万葉集は相聞が一番大事だというんです。でも、先生は絶対にそうは言わなかった。雑歌が一番大事であると言われた。

雑歌は踏歌である。踏歌は歌垣みたいに練り歩く時のものを踏歌といいます。平安朝時代の貴族の年表を見ますと、踏歌節会があります。その日は踏歌だからと書いてあります。これは男と女が恋の歌を歌いながら町中を練歩いて、貴族の家に練り込んで行くもので、いく日もやっています。何処かの家に練り込んで、そこでお水と食事を頂いて、乱交が段々できていくわけです。そして、しまいは宮中にも練り込んだというのだけど、大変淫猥なものだったようです。淫靡で品が悪かったので外国の使節やなんかに見せるにはとても恥ずかしかったわけです。平安朝の末期になり踏歌は男踏歌、女踏歌と分けられて、意味が無くなってしまったのです。それで、踏歌節会という儀式だけが残りました。

だけど昔は雑歌は踏歌だったのです。ですから、そう思って読みますと、万葉集の歌って言うのは見方が変わってくるわけです。挽歌というのは本当は、誄（しのびごと）を源としていて、奏上するものです。天皇とか自分の仕えた人に、「私はこういうふうに一心にあなたにお仕えしました」ということをしきりに申し上げて、自分の魂をさし出そうというものです。ところが、長すぎるので、五七五七七だけにしてたくさんの人にやらせたのです。これが挽歌になって、人が死んだ時の歌というふうになっていったのです。

歌

歌というのは初めは、崇神天皇紀をお読みになるとわかるように神憑りするのを歌といったわけです。歌というのは律文です。律文でなければ歌と言わない。

今、現代短歌で、新短歌の人なんて、しゃべり言葉でリズムのない歌を作ったりしておりますけど、あれは歌としては外道です。

何故かと言いますと、使い慣れた言葉、ものを言うことばと歌を分けるというのは、崇神紀をお読みになるとわかると思います。

崇神紀には、少女が出てきて突然、「ミマキイリビコハヤ、オノガヲヲ、

と普通は解釈されています。

ところが、先生にかかると「山尋ねという神事があるから、山尋ねをして、昔死んだ人の魂を尋ねて行く。あなたは亡くなって息がとだえてからだいぶ立ちますけれど、もう戻っていらっしゃらないのでしょうか。それじゃ、私、山尋ねの儀式をしてあなたの魂を呼び行きますわ」そういう歌になってしまいます。

古代だったら、山尋ねって言葉があったらこれは挽歌ですね。そういうふうに考えなけりゃあなりません。

「夕されば　小倉の山に鳴く鹿は　今宵は鳴かず寝ねにけらしも」という歌は舒明天皇と雄略天皇と二つあるんです。同じ歌がどうして二つあるんだろうという疑問がおきてきますね。

最近の角川書店の『国歌大観』のように重複しているものは捨て、欠番にされるとこまるんです。あれ意味があって二つあるんです。何故二つあるかって言うと、雄略天皇の場合ですと、逆う解釈が朝鮮人の方から出されています。雄略天皇っていう人は、父方の従兄弟を殺しているんです。「朝、狩りに行きましょう」と言って、イチベノオシハワケという従兄が誘いに来たら、「変な事をいう奴だ」って怒るんです。それも、今の人ではちょっと解釈できませんけど、朝一番の獲物は人間でもよかったのです。「早く狩りに行きましょうよ。一緒に早く行きましょう」と言って、眠っているのを起こすように連れて行く。殺されると思うんですね。それで殺されるくらいだったら、先に殺しちやおうと思って、雄略天皇がイチベノオシハワケを殺すわけです。

そうすると、その人は死んだんだから、もう鳴かないという歌が、「夕されば　小倉の山に鳴く鹿は、今宵は鳴かず寝ねにけらしも」というものだと朝鮮語からは解けるといいます。

この「シカ」っていう言葉は「山辺」と書いて、「シガ」と読むそうです。だから朝鮮での解釈は「小倉の山にいたあの市辺のオシハワケは今宵はもう鳴かない。死んじゃったから」という歌になります。

もしそうなったと考えれば、舒明天皇の方は別の解釈をしなければならない。宇も小倉の山が小椋山とっていますしね。

丁寧に丁寧に占典を読みますと、色んな事が解けてきます。それと考古学の方からもアプローチしていかなければなりません。

折口信夫の学問

先生は柳田先生と学問を同じくして民俗学をやった人だけれど、柳田先生は民俗学一本です。例えば、柳田先生は桃太郎っていったら桃太郎の話をばあっと集める。そして自分の結論をぱっと出す。その結論は非常にすばらしい。そういう人です。ところが、折口信夫という人は、今、私がしゃべっているみたいに一つの話、神の話をすると、あの話もこの話も、国文学の色んなものとくっついていく人なんです。

ですから、ある意味では総合的にわかる。だけども、こっちの頭が錯乱してしまうから、大変わかりにくい点も出てくるのです。

神という一つのものを考えた時、たった一つの神をずっと追って行きますと、今の○×方式のように、答えは一つということになってしまいます。先生の場合は答えは一つじゃない。答えが無い場合は「答えは無い。後はあなた方が研究しなさい」ということになってしまうわけです。

万葉集の解釈

うものは、非常に修正を加えられたものだ」と先生は言っています。何回も何回も天皇家に都合のいいように修正し削除されたものであると思われます。

この事は、持統天皇紀（持統五年八月）にでてきます。大三輪氏、雀部氏、石上氏、藤原氏、石川氏、巨勢氏、膳部氏、春日氏、上毛野氏、大伴氏、紀伊氏、平群氏、羽田氏、阿部氏、佐伯氏、采女氏、穂積氏、阿曇氏、この十八氏から墓記を取り寄せています。持統天皇が何故、墓記を取り寄せたのでしょう。墓記といいましても、系図だけではありません。例えば、穂積という村があるとしますと、その村には穂積氏の語り部というのがいました。その語り部が物語ったことを墓記として、文字で残してあったものだと思います。それを十八氏の人達から持統天皇は取り寄せたのです。

そして、「日本書紀を作る時に、この十八氏の古歴と天皇家のものとごちゃ交ぜにいたしまして、いらないところは削り取って、天皇家の所はみな奪って、万世一系という本を作った」ということを先生は非常に強調されます。十八氏の物語の中で、天皇家を万世一系にする為に、どのくらいの修正を加えて、どのくらいのものを削ったのかは分かりませんが、稗田阿礼を通して来て、大事なところだけ暗記させてうまく編集して万世一系の体系をこしらえたんです。「こんなにみごとにやった天武天皇の創作力というのは驚くばかりである」と先生は書いています。それぞれの信仰を持っていて、それぞれの神を持っていて、それぞれが統治していた。その国を一つにまとめて、天皇家の国の初めからの話にしてしまおうと言うんですから大変な作業ですよね。

ですから、日本書紀はどこからどこまでが本当なのか分からないわけです。眉つばものである。だけどもあれしか本がないですから、あれから類推する以外に方法はないわけです。

先生が他の学者と違うところは、小説も書くし、詩も書くし、何でもやる人であるということです。そうしますとね、文学を書く者っていうのはね、どういう時にどう書くっていうのは、感でわかるわけなんです。私なんかも、もの書きですから小日記な文章には敏感です。

日本書紀を読んでまして、唐突に変な詔勅がでてきたりすると、「うーん変だな。これは後で入れたものだ」とか、変な風にちょっとくっついていたりすると、「これも後から誰かがつけたな」と思われるわけです。昔はコピーもありませんから、みんな書き写しでしょ。写すだけではめんどくさいくたびれちゃうんですよね。そんな時、ちょっと自分の好きな事を書きたいですね。だから、勝手に自分の考え方を挿入するっていう事もあるんです。丁寧に読みますと、万葉集にも日本書紀にも結構みられます。先生もこれをよく見付けだされます。

総合的解釈

日本の古代は古事記、日本書紀、万葉集、風土記等あらゆるもの総合して考えてみなければわからない。万葉集では本当はこういっているから、「じゃあ、これとこれはくっつくかな」「民俗学的にはあの町へ行って山尋ねがあったから、これとこれはくっつくかな」というように。

「君が行き　長くなりぬ　山たづね　迎へか行かも　待ちにかまたむ」

（万葉集巻二、八五）

この歌は先生によると挽歌なんですよね。だけど恋の歌だということにされています。「あなたのおいでになったのは、行ってからだいぶ遠くになりますけれど、私はお迎えに行こうかしら。それとも家で待ってましょうか」

言ったら、普通の料理の本にも書いてあるというのです。人間の肉の塩辛のことを「ししびしお」と言うらしいです。孔子さんは自分の弟子が処刑されて醢になって食卓の上にのぼった時、「ああ、これが子路の姿かもう醢を食べるのをやめようかな」と言った話なんか、大きな字典にはのっておりません。ですから、日本でも食べない部族もいたと思うけど、食べていた部族もいたと思います。日本にはたくさんの部族がいましたからね。

宍人部の宍人という言葉を先生の全集の中からピックアップしてずっと調べてみましたら、「シカの肉のこともシシと言った。イノシシもシシ。人間の体もししむらという。食べられる肉ということである」と書いてありました。そうしますと、どんな肉でも食べられる肉だったらシシといったということになります。

それが私の産まれた秋出ではずうずう弁ですから、ししでもなけりゃすでもない。「すしすし」って言う。先生は「すしという言葉はそこから出たもので、肉を保存するために、もろみ発酵させたものだ」と言うのです。もっと調べてみたら「人間の首をもろみ（醢）の中に漬けて天子様が大事に食べたものであります」って書いてあったのね。誰も読まないからと言って、こんなこと書いて「先生、よくぞ摘まらなかったなあ」と思いますよね。

神醢（ひもろき）

里見 弴が短編ですけど「ひえもんとり」っていう小説を書いています。それは、無頼者が「おれは、これから死ぬぞ」と処刑場へ威張って出てくるんです。それで首を斧と延ると、バサッと首を切られる。周囲で「ひえもんとり」という事をやる白い着物を着た人達が、「刃物を使っちゃいけない」

接で爪で掻きむしってその人の生肝をとる。取りっこするわけです。それで「今年もあいつが一番になったら悔しいから、おれが今年は取ってやるぞ」って言うんです。山のように人が群がって、掻きむしって肝臓を取って、「おれが取ったぞ」と言う。そしてその肝を干しておいて、病気の人に食べさせる大事な薬にするわけです。これを「薬食」（くすりぐい）というのではないでしょうか。

神醢は、今では「神の醢」っていうふうに字を当てるので、全然、思いもよらないわけですが、「神醢、ひもろぎを立てる」って、よく書いてありますよね。神道の儀式に関係するもので、なんか竹垣でもするのかしらと思いますね。先生は神醢とは「肉の干したものである」と言ってるんです。出石神社の神宝は神醢で、熊の神醢である。これは垂仁天皇紀に書いてあるんです。「熊の胆（い）のことであります。」って先生は言っています。熊の胆ね。熊の胆のうですか、干したものです。平安朝になると、「肝」という字を書くようになる。そうすると、里見 弴の「ひえもんとり」っていうのは「神醢とり」のことをさしているということになるのかも知れないですね。私は「ひえもん」っていうから、冷えたもの、死んだ人をとる、そういうように解釈していたんだけど、多分、神醢でね。

日本書紀の編纂

出石神社の人はアメノヒボコの方から来た渡人神で、出雲の人とちょっと違うんですね。出雲と戦ったり、仲よくなったりしている内に、体になって、出雲、出石、わからなくなっちゃうんですね。

日本の神話を読みますとほとんどが出雲、出石の神話であります。アマテラス神話っていうのはほとんどないわけです。「これは多分、日本書紀とい

雲の方へスパイとして送られます。天孫族は出雲の国が欲しくて色々とスパイを送るんです。アメノワカヒコという人とアメノホヒという人はスパイで入って、最終的には出雲の国を取ってしまいます。アメノワカヒコの場合は、天皇家の方から高木の神という人の命令でスパイとして大国主の家へ入った。ですけど大国主は彼を可愛がって大事にしたんです。それでアメノワカヒコもとても大国主が好きになって、大国主の娘さんに貰った。そして、この国を自分の国にしたいという気持ちがあったものですから、近江の方から「どうなった。どうなった」って聞かれても何も返事をしなかった。裏切者を高木の神が怒ってアメノワカヒコを殺すんです。処刑されるわけです。出雲の方ではかわいそうだからお葬式をしようと思ってますと、近江から人が来てさっとアメノワカヒコの体を持っていってしまう。どうしてなんだろうって思って私もずいぶん考えたんです。何故持って行ったのか。処刑したんだから、もうこのままほったらかしといていいんじゃないかと。

この時文献は、宍人（ししひと）が出てきたのです。それで先生は宍人をなんと解釈しているのかなと思って調べてみましたら、「のちには動物の骨と肉を分ける人」となっているんです。ここでは、人間の骨と肉を分ける人ということになるわけです。どうも処刑した人肉は食べていたらしんです。そういうことが段々分かってきました。

次には雄略天皇の時の宍人部が、何故作られたかというと、あの人は狩が好きだったからです。狩りに行って獲物をとる。狩りは神事です。神事の一つとして狩りをやるんです。ですから、狩りをする最初の朝一番の獲物を神に捧げてみんなで誓いを立てる。この神事が大変大事なんです。何故人事かと言いますと、みんな弓矢などの武器を持っていますから、誰を殺すかわからないわけです。ですから「なるべく動物だけを殺すようにして人間は殺さないように」という誓いを立てるわけです。

雄略天皇は狩りの時、「私はナマスが食べたい」と言った。そうしたら酢臼が震え上がったというのです。わからないですね。膾（ナマス）が食べたいって言ったら、どうして震えあがるんでしょうね。とにかく、まわりのものが震え上がったわけです。雄略天皇はそれを見て、「むかっ」としたそうです。そして「怒って、いきなり側にいた奴者を殺した」って書いてあるんです。それがどう関連したかは省略されていますが、たぶん奴者をナマスにするのに宍人が必要だったらしく、宍人部の話がでてくるんです。そうするとあんまりよい話じゃないですが処刑した人を食べたっていうことになるのですね。

この淵も中国で紅衛兵が人肉を食べちゃったっていう話があったでしょ。漢人種っていうのは最近まで食べていたということがだんだんわかってきたんです。漢人種の漢っていう字のさんずいを取った「莫」という字は、二手足を縛って焼き殺す」という意味なんですって。「字統」で有名な白川静が書いています。

ししびしお

ですから、多分食べていたんじゃないかなと思って、中国人が書いた『倭われた中国人』という本を読んでみました。そしたら克明に書いてありました。そこには、孔子様が「醢が大好きだった」と書いてあるんです。この字読めなくて、字引きを引いたら「ししびしお」って読むんだそうです。意味は「人間の肉を刻んで塩辛にしたもの」とありました。びっくりしました。菁通の漬物辞典ですよ。

私の娘はとても料理に詳しいので、「ししびしおをちょっと調べてよ」と

祝詞・寿詞（のりと・よごと）

先年の昭和天皇崩御の時、殯をしました。まだ記憶がおありでしょう。そして、歌舞・踊曲をやりました。上から下へ宮下するのは「祝詞」です。下から上へ申し上げるのは「寿詞」といいます。寿詞の「よ」というのは、霊魂を差し上げますということを意味します。そうしますと、死んだ人に魂がのり移って再生復活する。それをこの前の昭和天皇の時は誄（るい）として奏上いたしました。

はらえ

ですから、魂を復活させるには、こちらの魂を充実させなければならないわけです。例えば先生に言わせると、「禊は、悪いものを祓、流すものではない。水の魂を着ける。水の清らかないい魂をつけて、差し出す行事」ということになります。きたないものを落とすのを「はらえ」という。一「はらう」と言わないで「はらえ」という。何故かというと、人にやってもらうしかない。つまり神主さんに祓ってもらう。だから「はらえ」というのである。それで禊というのは、もともとは水のきれいな魂を体に着ける。それを結んで斎籠（いわいこめ）めていい魂を差し出すことである。そういうことが、日本の信仰の中にあったわけです。今でも色んな神社でやっていますね。

末子相続

その後になりますと、段々神というものが人間になってくるのです。人間の中でも、もっとも威力が強いものを神と崇めるようになってきます。それは、たぶん旧約聖書のエホバなんかと同じで、大変残虐な人を指したと思うのです。旧約聖書には人間の長男と牛や子が産んだ初子は神の所有物であることをしきりに書いています。日本でもその思想が入ってきているんだと思います。長男が位を取るということは、だいぶ後になってからで、日本書紀を読みますと、みんな末子相続です。今でも南方の方では、末子相続というのがありますね。

日本の場合、天皇家の系図をよく見ますと末子相続です。男兄弟がいると、長男は神の所有物とされます。この長男が子供を生んだ時もやはり長男は神の所有物とされます。こういう形がずっと続きます。家の後取りは全部、末っ子がとるわけです。旧約聖書創世記二二章によると、神はアブラハムに「長男のイサクをよこしなさい」といいます。神のために焼き殺して捧げるように命じられます。イサクは自分を焼く薪を背負わされ父のアブラハムは火と殺すための短刀をもって神の前にゆきます。

長男は神に食べられていたんです。神のものですから大事に保存しなければならない。片端になったり、病気になったものは、神はいらないんです。神は完全無欠な子供が欲しいんです。ゆえに大事に育てようというわけです。日本でも長男は「甚六」になるほどおっとりしている。それは「そういう習慣が流れてきて、神のものだったから大事にと育てた結果じゃないかな」と私は思うんです。

雄略天皇の場合も末子相続です。この人は大変残虐な人でした。誰でも殺した。じゃんじゃん殺したんです。武烈天皇なんか妊婦の腹を裂いた。昔の王者というのはかなり残虐であったのです。そして、それは讃えられていたのではないかと思います。

宍人部（ししひとべ）

ずっと神代の方に遡りますが、アメノワカヒコという人が近江の方から出

れています。

例えば、古事記には蛭子を「葦船に入れて流しやりつ」。「葦」という言葉も大国主系の言葉なんです。「葦原色許男（あしはらしこを）」という名前の人がそうなんです。葦（よし）悪（あし）と言うように、葦という言葉は、よくないという意味を含めます。あしざまに書くわけです。

これは、私が創作したんじゃなくて持統天皇が「あんないやな奴はこんな名前にしてやんなさい」と、もじったりしています。エビスを言代主に当てるのもそれです。

魂触り

もう一つは魂が遊離するということを昔の人は考えた。魂が遊離するというのは、あるべき所に魂が入っていない。そのために死んだり病気したりするというふうに考えていた。それで、魂を呼ばなければならないのでタマヨギというのをします。天照大神が岩戸の中へ隠れたという話がありますが、先生は「魂が遊離してあそこに隠れたんだ」と言うわけです。そこへ天の宇受賣という今でいうストリッパーみたいな女の人が出て来て、あそこの前でヌードで踊りを踊ります。これを「魂ふり」といいます。岩戸の中に、魂が遊離した人がいるわけです。そうすると、その前でアメノウズメという人が桶を伏せて俎の葉をかけて、その上に立って踊るわけです。その時に、桶の上を踏みます。

今でも能楽で踏みますね。あれは下の霊魂を上に付着させる。能の場合は舞台が下に響、鏡柄が座けてあります。鏡柄幕、ここの上で踏むわけです。能の所作なんて本当に何もないんです。サシと、とうキと、左右、これしか型がないんです。私も長年やりました。ただ踏む場所がどこか、それがとても大事なんです。魂の一番強い所でふまなければいけないのです。

今ではいい音を出す為に鏡を埋けていますが、実はそうではない。折口先生は「舞はもと墓の上で行うもの、芝居は芝の上でやるものである。全く異なる演劇である。墓の上の霊の強いところで踏み自分の霊を休に付ける。そして舞を舞って魂鎮めをする」と言っています。

アメノウズメは魂鎮めをするために、桶の中の地霊を踏み起こして、自分の体に憑けるわけです。そして身についた魂を天照に衝突させる。魂を衝突させることを「魂ふり」といいます。「触り」と書くとよくわかります。魂が衝突する。そうすると天照に魂がくっついて、再生復活して岩戸から出てくる。そういうことを神事としてやっていたわけです。これを「魂おき」とか、「魂まき」とか、「魂呼ばひ」とか、そういう言葉でいいます。

山尋ね

津山の方では、返った方の霊を尋ねて行くというような行事はありませんか。山里の方ではまだやっている所があるかと思います。これは、山の彼方に魂が遊離してしまったので、山へ尋ねて行くものです。魂を呼びに行く。その時たいてい老人が行くんです。白い着物を着て杖を持って行きます。杖というのは地を突くものです。地を突いて地霊を憑けるのです。杖とかずとかを持って地面を突いて足音に、いい魂を憑けて、魂を呼びに行くわけです。山に行って魂を呼ぶと、なんか身に応答があった思って帰って来た時、生き返った例がたくさんあったということです。仮死状態の時に、もう死んだと思って七日七夜やって再生復活を待ったのです。

蛭子（ひるこ・えびす）

イザナギ、イザナミが産んだ子供の中にヒルコがおります。天御柱をイザナギとイザナミが廻って、「あなにやし　えをとこを」「あなにやし　えを娘子（おとめ）を」と女の方が先に言って男の方が後に言った。本来、男が先に言って、女が後から言うのを逆に喋ったのでヒルコが産まれた。ヒルコは葦船に入れて捨ててしまったという話があります。そして蛭子と書いて、「えびす」と読み、蛭子神社というのがありますね。

これも古事記の場合は物語りだけですけど、日本書紀の方になりますと歌が出ております。

一かぞいろは　憐れと思ずや　ひるの子は　三年になりぬ　足立たずして

先生は、「足が立たないって、ヒルコのヒルはヒビルのヒルかな。ちょっとわからない。」と言いましたが、私はすぐ分かったんです。「ル」は日本人は好みません。「やっぱり」と言わないで、「やっぱし」と言ったりするでしょ。「らりるれろ」の言葉をあまり好まない。たいてい省略しようとします。ヒルコはのちにヒッコ。足立たずして、ビッコなのです。ビッコという言葉は今は言ってはいけないようですが。

「足」偏に皮で跛行。当地では何とおっしゃるのかわかりませんが、静岡の方では歪むことを「えむ」といいます。「この器はえんじまったよ」おもしろい言葉を使うなと思いました。

私は静岡の方へ、嫁に行きましたもので、「えむ」は歪むことと知りました。蛭子は「えん」だ子。歪んだ子びっこという意味になります。足が立たなくて、かたちんばで、歪んでしまった人。えむ子　えみし　えびす　です。そういうのが産まれたのです。

ですから、これを蛭子（えびす）神社と呼んで、「言代主と、諸に祀ったわけです。言代主は、出雲の系統で敵になります。敵になる人のことをおとしめていいます。

直（たて）系と横系

言代主も大国主はどちらかというとたて系ではなく横系の神様です。天皇家は万世一系で直系の神様です。大国主というのは、民主主義者だから横の連帯を大事にします。出雲を本拠地としたかどうかはわかりません。けれども先生は、「紀州から九州まで大国主が統治していた」と言うんです。紀州から南は全部大国主が統治していた。調べてみると確かにそうです。播磨国風土記を調べるとそのことがわかります。天の香具山の名はどうも出雲系のカグハカという所から来た地名らしいのです。とすると神格のある山で、出雲の系統の神様ということになります。だから、神武天皇が入って来た時、この土が欲しくてしょうがない。変装してまで、こっそり盗んで取りに行こうとしなければならないほど、出雲の神の大事な物実でした。

このように弥と大国主の領域であったことは、文献を調べればわかります。ほとんどの神社は大国主を祀っています。大国主というのは横の連帯を持つから、統治できるのです。何処で命令するか。その頃どういう命令形態を持ってたのか。八百万の神様は常に相談をしなければならない。相談しては派遣する。

十月に神が集まって相談して散って行く。そういうことをずっとやっていた横の関係です。そうしますと、天皇家は直系ですから犬のように命令に無条件に従うことをこのみ、横はみんな悪いんです。横暴だ、よこしまだ、横車を押すだ、横柄だとかという「横」という言葉はいい意味では使わない。権力を取った人と追われた人というのは、非常に微妙で後世までいじめら

行っても牛がいっぱい祭られています。おっぴらに牛を祭るというよりは、ちょっと隠し加減に祭られています。このことは多分、天皇家の方が強くなりまして、物部系が弱くなったからだと思います。

物部の物っていう字は「牛」偏ですよね。牛と物（霊）はつながっているんです。ウルシュメールの文化をみますと、牛は霊物です。勿はハープのことでしょう。琴を弾いて、牛信仰の人は神懸りをします。こういう神懸りの信仰が日本にはずっとあったわけです。

つまり、貝から神になるように。そのころは、動物信仰というのがあります。蛇の信仰、蛇の信仰などです。牛の信仰者と蛇の信仰者は仲が良くて結婚します。それは、ウルシュメールの紀元前二、〇〇〇年、今から五、六〇〇〇年前の「円筒印章」に、牛と蛇の結婚図がたくさんでてくることからわかります。

日本でもスサノヲ命という人は、八岐大蛇の「鉏（つち）」の人と結婚します。だから牛と蛇の仲良しというのは、日本まで入ってきている文化ということができます。

やはり、壱岐へ行った時のことですが、猿がいっぱいいるというので男伝神社へ連れて行ってもらいました。後ろの方には牛がいっぱいおり、蛇と牛の合体した石もいました。このように牛と蛇はくっついて結婚をする。そういう神々もいたわけです。その人達は出雲の系統の人達です。

それから、シシの信仰というのがあります。ライオン信仰です。ライオンのことを「シュンガー」といいます。「駿河」と書いて、ライオンという意味だそうです。変はよく見ると、ライオンの顔をしてますね。シンガポールの町の名もライオンです。

動物信仰の神々も沢山入ってきます。ところが、国土が狭くて喧嘩して大変なものですから、この人達が次第に結婚し、融合して多神教になるわけです。

旧約聖書を読みますと、本当に一神教です。エホバの言うことを聞かない人はみな殺されてしまいます。「滅ぼすことが正しいことだ」としきりに書いております。旧約聖書に牛が出てきます。だけど、「牛は祀ってはいけない」と書いてあります。

このように旧約聖書の一神教というのは、日本とは違います。日本には他部族がいっぱい流れ込んできているのです。この列島の中で仲よく暮らして行くには多神教になるしかなかったのでしょう。ですから、沢山の神々が婚姻によってつながっています。

舎人・采女・日置部

一つには、天皇家の政策というのがあります。「舎人」「采女」というものを組織して、「国造」のところから召し上げます。信仰上の君主（国造）の長男長女は、たいていこれを舎人、采女として差し出せと言われます。そうすると、この人はこの国定の持っている信仰と天皇家の信仰と両方を祭らなければいけない。そしてある時、お宿下がりをして、そこに舎人部というのをこしらえて、天皇家の支配地とする。この舎人は何をするかというと、天皇家の徳の普及者です。これを日置部と言います。

このようにして、信仰の普及、神の普及をずっと拡げていきますと、いきおい、ここの国造の持っている神様と天皇家の持っている神様とがドッキングします。ですから何処の神社へ行っても神様が重なっていっぱいいます。色々な神様がごちゃまぜになっているというのは、諸国の舎人達が普及して歩いたからです。こうして色々な神様が集まります。さらにどんどん上へ乗せて行きます。これが日本の信仰の形です。

い。「じゃあどうしてか。」と神様かって聞きますと、大物主を祀らないからだという。

動物信仰

大物主というのは出雲の神様です。出雲の神様というは、当時一番強かったのです。つまり物部系といいますか、後の中臣系です。あの人達が日本の原住民でした。大物主もその系統の蛇身の神です。スサノヲもむろん原住民です。スサノヲは牛の信仰者です。今でも牛の角をつけている兜があるように牛の信仰というものはずっと続いています。それは、何処から来た信仰かと言いますと、どうもウルシュメール、西アジアの方から来た信仰のようです。むろん朝鮮や中国を経由して入ってきております。ウルシュメールの文化がいきなり入ってきたのではありません。少しずつ変化しながら日本へ入ってきて定着したのです。

牛のことを万葉集で牡牛（コットイ）といいます。ゴッテ牛っていう所ないですか。ありますでしょ。それ訛りです。ゴット、コッテ、コットイとか言います。

有名な業平の歌に「名にしおはば　いざ言問はむ都鳥　我思ふ人はありやなしやと」いうのがありますね。「言問い橋」は牡牛橋に相違ないと思って、調べてみますと、言問橋のたもとに大きな牛島神社というのがありました。大きな牛が二頭どんといました。浅草あたりの人達に話を聞きましたら、「浅草でお祭りがありますと、言問橋を渡って必ず牛島神社の牛を撫でて帰えらなきゃいけない」のだそうです。それほど牛信仰っていうものは定着しています。

この間、壱岐の国へ行きました。牛がいっぱいおりました。何処の神社へ

います。

そんなことを大きな声で言ったら、本当にお縄になるようなことを平気で言う人でした。だけども不思議なことに、先生は宮廷のことを調べていたせいか、非常に大事にされました。

先生は国電、昔の省線の中で、一兵卒が殴られているのを見て、たまりかねて「やめろ」と言ったら、殴られたそうです。家に帰ってきて「悔しい悔しい」って言っていました。そんなことが、二、三回あったようです。また、「あらひと神事件」といいまして、久米正雄という作家が満洲国皇帝のことを文学報国会で「あらひと神」と形容したことで問題となった。憲兵が取り巻いている会議の席上で、最後に先生が、「私どもの国ではあらひと神と申しますと、神さま一人のことを申しあげるのではありません。現（あき）つ人神と申し上げる時は、これはまた違います」と言ったら、びっくりして憲兵が飛び帰った。それで久米正雄は助かったという話もあります。このように本当は正しいことをきちんと言う人なんです。だけども、ずっと先生は皇国史観だと言われつづけていました。ところが、ちゃんと調べると皇国史観ではないんです。

暦の普及

スサノヲが「あお山を　から山なすほどに鳴いた」という話がありますが、他部族と結婚するということになるのです。何故うまく行かないのか。信仰が違うからだ。信仰が違うほど気味の悪いものはないのだそうです。隣の村ではこんなことをして、変なものを祭って、変なことを唱える。それだけで気味が悪い。また、そたらに隣の村に入って行くと、他部族だから殺されるということにもなるのです。

村々はそれぞれが国になっていました。古い文献で「国」ということばがでてきたら、それは「一村一国」のことで、皆信仰が違っていたわけです。それで「国近」という言葉があるのです。国造というのは「信仰上の君主」という意味だそうです。その一国の信仰上の君主は何をやっていたのかというと、毎年々始に一国の暦を作っていたわけです。暦（こよみ）の普及を第一番の仕事としていた。今で言うと暦はカレンダーですが、昔の暦はそうじゃありません。この日は商が帰るとか、この日は風がくるとか、この日は取り入れをしなさいとか、この日は山へ入っちゃいけないとか、たくさんの禁止事項、ことわざを含めたような、一年の生きる方針を指導するものだったのです。

先生によれば、「天皇さんも自分の暦を普及するために、その仕事をやっていた」と言うのです。つまりシャーマンですから、皆、神懸かりで暦をことさらえるわけです。当たらないシャーマンは焼き殺されたりします。これは中国あたりで焚巫（ふんふ）といわれます。漢字がこれだけ日本に定着しているわけですから、沢山の中国人が入って来ていたはずです。そして自分の暦が一番当たると信じるわけです。もし当たらない場合は、バチが当たって国が乱れると信じられてもいたわけです。

それも崇神天皇紀を読むとよくわかります。疫病がはやって「人民（おほみたから）尽きなむとしき」と書いてある。人民の大半はすでに死んだ。そして、苦し紛れに百姓は流離し反乱を起こすものも出てきた。「どうしてでしょうか」と神におうかがいを立てたら、大国主と天照大神を一緒のところに祀ったからだという訳が出た。それで大国主と、天照大神に巫女をつけて祀り直した。そうすると、少し安らいできたけれど、崇かるべき時に祟かったり、暑くなければいけない夏は寒かったりして、やっぱりうまくいかな

文化を花開かせた。猿人は機です。ホモサピエンスは、いきなり着物を着て出てくるんです。新人は、猿人と宇宙人とのあいの子というはなしです。宇宙人を大神とし、神と人とのあいの子ということです。今でも人間は空を飛びたがりますね。宇宙へ行きたがるじゃありませんか。つまり地球の外へ行くっていうことは、先祖の国へ帰りたいということを意味しているのではないかと思うのです。

上から神様が降りてくるという話は天つ神ロケットで宇宙人が天降るんです。その話をリアルに考えれば、人類を創成したのは宇宙人だということになり、我々を作った人達は上から降りてきたと考えてもおかしくはないんじゃあないかと思うのです。

この本は世界中で大変評判だそうです。よく売れているようです。

歌垣と市

先生は天つ神、天の安河など天と地というものを、非常にリアルに考えておられました。従って、天上の話を地上の話に比定し「天の安の河は地上では近江の国野州郡野州川の下流」のあたりと非常にはっきり指しております。だから神話の場合は、「天上の話と地上の話は全部比定されて書かれているので、近江と考えなさい」と先生は言うのです。

そうしますと、イザナギ、イザナミの話は、近江の国と出雲の国の話なってしまうわけです。イザナギとイザナミという名前ですが、イザっていうのは「去来」と書きます。これはセックス用語で、「成人、成女、子を産むことができる男と女」という意味になります。アダムとイブです。昔は男と女がどういうふうに結ばれたかというと、「市」をたて「歌垣」をすることで結ばれていました。そこにはたくさんの人が集まりました。

里人、山人、海人、外国人達がいっぱい集まって物々交換市をたてたわけです。何故、歌垣をするかと言いますと、一つの村は、閉鎖された一つの国でしたから、その国の中でばかり結婚していますと、いい子が産まれなくなる。新しい血を入れたいという要求も出がたつわけです。そうすると外国人もいっぱい入ってきて歌垣をやりまして、気に入って男と女がそこで子種を仕込んで帰って行きます。そして、新しい血が入ったいい子が産まれるのです。そういう子供を育てると村がよくなるわけです。それは生物の発展の本能的なものです。

そういう市をたてた時に、イザナギとイザナミという男と女が合体したわけです。そうして近江の方で暮らすようになるわけです。そうすると、スサノヲみたいなすぐれた子が産まれるわけです。ところが、イザナミは他部族なのでうまくいかないもんだそうです。

子供を置いて逃げ出すということがたくさんあったそうです。それで彼女は出雲へ帰るわけです。そうしますと残った男の子は、「お母さんの処へ帰りたいよ」と言って、ワアーワアー鳴くわけです。こういう話はどこにだって腐るほどあったことだそうです。

日本列島は皆、漂流者でした。今では、渡来人とか渡来系という言葉で呼びますが。このことは崇神天皇紀を見るとよくわかります。崇神天皇が入って来た時は、四方は全部ちがう部族であった。従って、言葉がわからないから翻訳したと書いてあるのです。「日本という国には、流れついたあらゆる部族達がひしめいていた。そこに天皇家が割り込んで来た」と先生は言うのです。こういうことを言いますと、神社庁から嫌われるそうですが、本当はそうだと思います。「天照さんは後から割り込んで来た人ですから、まわりが皆敵だった。だから、びくびくしておったのであります」と講義で話して

マというのはくっついている。例えば、謡曲「海人」という曲があります。その中には海の中へ入ってタマを拾って、見えないように持ってこようとして、お乳の下を掻き切ってタマを押し込めるというのがあります。そういうようにタマと海とは常にくっついているのです。そのタマはどういうタマかというと、常世の永久の魂、時間がなくなるような魂です。言ってみれば不老長寿、そういうものを籠った魂です。そういうタマは必ず拾うものだと思い込んで、海に行って貝を拾うわけです。

人間が作った神

このように「物の考え方、そして魂の信仰をずっとできたけれど、それでは何が何だかわからない。目に見えるものが欲しいということで、神を考え出したのだ」と先生は言っている。

先生は諏訪で「おん柱」の講演をなさった時、「人間の作った神ですからまるまる嘘では信仰ができない」と言うのです。

私は、とても不思議な言葉だと思うんです。人間の作った神であるから、まるまる嘘ですっていうのが普通なんだけど、「嘘では信仰ができないから嘘じゃあない」って言うんです。人間の作った神様というものがあるから信仰ができるのです。そうすると、神様というのは人間なんです。ですから、全部人間の形になっている。これは外国の神様は外国の顔をしてまして、日本の神様は日本の顔をしておりますから、多分、人間が作ったものであるに相違ないと思うのです。

話が脇にそれますが、この間、「人類を創成した宇宙人」（ゼカリア・シッチン著　徳間書店刊）という本を読みました。

ホモサピエンスという今の人間の祖先の新人は非常に唐突に現れた。突然、

ないと本が焼けてしまうのでもったいない」と言いましたところ、「それはまだ読んでいないから、秘閣されると困るねん」と、「でも焼けてしまうよりはいいでしょう」と言ったら、ある時「それでは読みます」と言って、向こう鉢巻きで幾日も眠らないで全部読んでおほえてしまいました。それをつなげて、先生の論文を読みますと色んなことが脈絡もなく出てきます。本人の中ではつながっているんでしょうが、私どもが読むとつながってこない。意味が分からないのです。

先生が本当に言いたかったことを皆さんにお話しすることが私の使命として、肝に銘じて残生を生きていこうと思っております。

日本の神

今日は、「日本の神々」ということで折口先生の考え方を皆さんに少しずつお話したいと思います。

日本の神様というのは、折口信夫によりますと、倫理とか道徳とはいっさい関係ありません。「ただ猛烈であればそれを神とする」という考え方です。ですから先生が神といっている人は、武烈天皇だとか雄略天皇のように人殺人をしたような残虐な人を想定しているのです。一方で、雄略天皇は非常に派もろいところもあり、やさしく、嫉妬深く、頭もいい激烈な人物でした。そういうものを合わせ持った人を神と言っていました。

ですから、日本の神様というのは、あまりいいことをして下さらない。みんな祟り神です。気に入らないことをすると祟るという神様です。

そういう点では、外国人が日本へ来ますと「日本の信仰は悪魔の信仰だ」と言うそうです。外国では、悪魔はものをあげると何でも願いを叶えてくれて、しかも、祟るというものなんだそうです。外国の神様はただ慈悲深くて、やさしくて導いてくれます。

日本の神様はそうではありません。日本は多神教で、神というものはたくさんいます。どうして日本は多神教で、外国は一神教なのか。一神教のおいのするようなところもありながら、やはり日本は多神教です。

タマ信仰

その日本の神ですが、折口先生は神を信仰する以前の姿を考えています。それは、タマの信仰です。タマを以前はカヒといっていた。中にどうやって入っているのか分からないが、神秘なものが入っている。これが物実（ものざね）です。中が洞になっている。空洞（うつろ）の中に現（うつつ）が入っている。だから目の中に物実というものが入ってそれを呼んだというのである。これは蚕のさなぎでもそうです。非常に不思議なものです。まゆをさなぎという。糸繰のことも「さなき」と言います。このように、中に物実が入って固く閉じられているけれど、ある時、蝶になって出てきて、ヒヒルになって飛んで行くわけです。大変不思議なものだったのです。カイを信仰して、虫のさなぎを腋につけてカラカラと鳴らしたのです。カイは玉である。カイと魂。魂は蓋である。物実の物は「もののけ」のもの。「もの」というと霊魂は物部氏が扱った。玉は魂でモノです。

魂の信仰。貝の信仰はずっと残っています。浜辺に行くと必ず石を拾う。タマを拾いに出たという。古今集、新古今集にそんな歌がたくさんあります。海の彼方の常世の国から、常里の魂を持った貝が流れついて来る。それを持っていると死なないとか、彼女がわたしを忘れないとか、そういうことを思ってタマを拾うわけです。タマ、魂。海というとタマと決まっているんです。昔のものを古典でお読みになると海が出てきますと必ずタマです。海とタ

「折口学による日本の神々」

穂積　生萩

折口信夫と私

「歴史と文化の街」津山に呼んでいただいて感謝しています。私は折口信夫の最後の弟子であります。折口信夫は昭和二十八年に亡くなりました。六十八才でした。その時、私は二十八才で、ちょうど四十歳年が違いました。先生は男の人しか近付けない人でした。ところが、私だけは近付いてしまいました。晩年書かれた「おとめごの歌」はほとんど私のことを歌った歌です。大変狭情豊かに、エネルギーを湧き立てられたようであります。昨晩、NHKの連続ドラマ『とうりゃんせ』をご覧になった方もいらっしゃるかと思います。老いた絵書きさんが、十七才の女の子を大変可愛がっていました。

あれを見ましたら、「ああ折口先生はたぶん、私をあんなふうに可愛がったのかなあ」と思いました。

折口先生の側に行くようになったのは、私が十七、八の頃でした。ドラマのように、先生は私のことを抱き寄せたりするようなことはなさいませんでしたけど、私を見るとしきりにものが書きたくなるようでした。つまり、絵書きさんが「絵書きというものは、とても業の深いもので、書きたいと思うものがあると、どんなことをしても書いてしまう」と言っていましたが、先生もそういう人でした。

このように、私も肉体関係はありませんでしたが、誰にもまして密接な関係を持っておりましたので、先生が亡くなられてから五年間はほとんど死んだようになっておりました。

ところがまだ命がありましたものですから、折口信夫の読みにくい論文・学説などをたくさんの方々に知ってもらいたい。是非分かって戴きたいと発心し、ずっと先生の仕事を継承し、折口信夫のことばかり考えて今日まで生きてきました。

私も七十才、剏が峠のところへきまして、これから先はたいした仕事はできないと思います。しかし、折口信夫という人はどういう人だったのか、どういう考え方を持っていたのかということくらいはお話しができるのではないかと思って、今日、皆様の前に立っております。

折口信夫という人は夢みたいなことを言う。幻覚を持っている。そんなふうに言われるんです。けれど実は、あんなリアリストはいなかったのではないでしょうか。古代の日本は、どうなっていたかということを自分の目で確かめ、どこまでも自分の足で歩いて触れて見なければ気がすまない人でした。

また、もう一つは非常に頭のいい方だったと思います。子供の時に万葉集を全部暗記しておりました。数字については乱雑な人でした。講義の時でも、小さなメモを持って居るんです。私どもみたいに本を積んだり、書類を持って歩くということのない人で、たいていのものは読むと暗記してしまったようです。

戦争の時、お弟子さんが中国の文献で何十冊という全集を「信州へ疎開し

年報
津山弥生の里
第4号（平成7年度）

平成9年3月31日

発行　津山市教育委員会
津山弥生の里文化財センター
岡山県津山市沼600-1

印刷　株式会社廣陽本社
岡山県津山市田町22